

「ひいっ!? いやあああっ!!ど、どうしてこんなこと!?!」

アニーゼの小さな体をオルソラがしっかり抱え込み押さえつけていた。
二人の股がはっきり開き、大事な所がくつきりと目に映る。

「くっ!! あっ!? ひゃん……!!」

じたばた暴れ逃げ出そうとするも、
オルソラがアニーゼの敏感なところを
愛撫して身体を脱力させてしまう。

「こっそりご自身の勢力を拡大がっているようでしたので……
そのお手伝いをしようと思ったのでございます。」

「こ、これが……
どうすりゃ手伝いになりやがるんですかあ……!!」

「あらあら、ご自身の子なら、
母親のあなたが手引きをすれば……と考えれば、
これほど確実な手段もないというもの……ではないでしょうか?」

「そ、それはそうかもしれないけど……
そんなのが長すぎるでしょっ!
私はそんなに時間をかけるつもりは……ひゃんっ!!」

オルソラは再びアニーゼの敏感なところを刺激して黙らせる。
「まあ、それは建前でございます……
本当はこのような淫靡な行為に興味があったからでして……」

「そ、そんな……私は興味なんて、ないのに……」

「アニーゼさんにもつい先日、生理がきたので、
先ほどの建前もありますし……これは好機と思い、実行に至ったのでございますよ。」

「そ、そんなのいい迷惑でもんです!!」

「さあ、遠慮はいりませんので、私達の身体で十分に
欲望を満たしてください。」
「人の話を……ひゃんっ!!」

突然の出来事に説明を受けても未だによく理解ができていない
上条当麻はほりほり手で頭をかいていた。

「なんだか、いまいちよくわからなかったんだが……
こんな好機は見逃す手はないよな……よし、そうと決まれば!!まずはアニーゼからだっ!!」

「じゃあ、いただきますっと……」
早速、アニーゼの処女膜を押し分け、ペニスを膣の中へと押しこむ。

「痛っ たあっ……!!!」
「くっ!!! さすがにきつい……!!!」

アニーゼの膣の中は痛いくらいにペニスをしめつける。
アニーゼのきつい性格を表しているかのようだった。

「それにすごく熱い……」

膣の中は、ペニスを焼いてしまうのではないかと
思えるほどの熱さを放っていた。

「はあっ! くあっ!!!」
「いやっ!!! あひっ!!!」

ペニスを包み込む心地良い熱を根元まで十分に
伝わせるため奥へ奥へと押しこんでいく。

「あああ、まあまあ……こんなにも小さいのに、
しっかりと男性のものを受け止めているのでございますよ。
いったいどこまで飲み込んでゆくのでしょうか……!」

「はあっ! はうっ! ンやう……」

「あああ、痛がっているだけではもったいないですから……
気持ちよくなってくださいね。
ここが良いのでございましょう?」

「ひぐうっ!!!」
びんっと張った乳首の先端をつまみ、
クリトリスを皮の上からやさしくこする。

「ひいんっ!!!」
たちまち、びくんっ!!!と身体が反り返り
ペニスをきつくしめつけ返す。

「くうっ!!! ますますきつくなって……
チンコがちぎられそうだ……」
なんともそれを繰り返すと、
「へあ やらあ……」

やがてそれつも回らなくなる程に体中から力が抜けきっていた。



「あ、アニーゼっ！！ 出るぞっ！！」
すぐにペニスは限界まで達する。
「ふぐっ！！くううっ！！」

欲望の赴くまま、それがさも当然の事のように
精液を膈内へ送り出した。

「ひやっつ やらあ……」

拒絶するかのように、膈をきゅっと絞めつけるが、
それは逆にペニスに刺激を与え、
精液を送り出すための手伝いにしかなかった。

「くう～なんて気持ちいいんだっ！！」
「ああ……たった今、射精をしているのでございますね……」
「ああ……アニーゼの膈内に……出してやる！！」

はじめて男を知る膈内を精液で満たす喜びを噛み締める。

「いやっ……やらあ……くっ、はなれっ！！」
「はは……いまさらじたばたしても遅い……」

じたばたと無様にあがくさまも、
女としての大事な部分を征服したという
男としての悦びに華を添えるだけであった。

「もうあきらめろって……
おまえはな、俺の赤ちゃんを生むんだよ！」

「っ！！ そ、そんなことはないっ！！」

「わかってるんだろ？中に精液届いてるのさ……
お前の子宮に、精液入ってるのを……」

「くうう～！！お、おまえの精液なんか……誰がっ！！」
「まだわからないか？ なら、わかるまで膈内に出してやるっ！！」

アニーゼの膈から抜くことなく、
続けざまにペニスを固くたぎらせるのだった。

「くっ!! また出るぞっ!!」 はあ……はっ……どうだ、わかったか?
「っ!! ンおっ!!、 もうはいらな…… あい……わがりまち……たあ、ひっ……ひぐっ」

アニーゼが搾り出すように返事を返した。

「よしっ、良い返事だ。よっ……と」
ようやくアニーゼの膣からペニスが引きぬかれた。

「ひうっ!!!」

股間にほっかり穴が開いたような気がして、
びくっと、身体が震える。
ペニスが膣に入っていないことに違和感を
感じてしまうほど、長い時間が経過していた。

小さな膣のどこにこんなに入っていたのかというほどに、
大量の精液が溢れ出す。
「まあ……たくさん出していただいて、よかったですね」

「ひぐっ ぜ、ぜったい殺してやります……
かくごしやがってください……
いぐっ! くう……」

「あらあら、あなたはお腹の赤ちゃんが父親の顔を知らずに、
お育ちになるのがよいのでございますか？」

「くっ……ぐう……」
孤児として育ち、両親と共に暮らすという憧れを描いていた
アニーゼにとっては痛い言葉だった。

「つれないこと言うなよ……赤ちゃんができたら、
俺とお前は、もう、他人の間柄じゃなくなるんだぞ」
「はぐう……!! そんなの、こっちから願ひ下げです!!
なにしろ……これで赤ちゃんができたわけじゃないんですからっ!!!」

「だいぶ調子を取り戻してきたじゃないか。大丈夫さ!!
そのときは、生理が来なくなるまでやってやるだけだ!
また、殺されてやるつもりはないからな!!!」

「そ、そんなあ…… そんなの……いやあ~!!!」
アニーゼの悲痛な叫びは、天には届かなかった。

「恥ずかしい話ですが……お二人の性交を見て……
もう我慢ができなくなってしまいました……」

「うわ……これならすぐに入れても大丈夫だな！！」
オルソラの股間にすでに十分なほど蜜があふれていた。

「はい……いらしてください」

入り口にペニスの先端を合わせ、前進させる。
とくに力を込めるでもなく、なんの抵抗も感じることなく、
ペニスはオルソラの膣の中へと入りこんでいった。

「ああ……！！ これが男性なのでございますね……」

「くっ……気持ちいいぞっ！！オルソラっ！！」

アニーゼのようなきつい締め付けはないが、
優しく包みこむようにまどわりつき、
動かすたびに細かいひたが絡みつく。
オルソラの膣は極上の名器と言えるものだった。

「あっ……私も初めてのはずなのですが……
どうしてなのでございましょう……
はあッ！！ 痛みなど感じることもなく……
むしろ体の奥底が、
暖かくなってきてしまうのでございますよ……んっ……」

「くっ……あれだけアニーゼに出したのに……
もう出そうだ……」

「はい……膣内にくださいませ……」

「オルソラも赤ちゃん、産んでくれるのか？」

「はいっ……あなた様の赤ちゃんを……
産んでみたいと思います……」

「よ、よしっ！！」

その瞬間、一気にペニスが膨張し、オルソラの中で精液が爆ぜた。



「くっ!!で、出るっ!!!」

精液が激しい奔流となってオルソラの膣の中に襲いかかる。

「ああ……私の中に赤ちゃんの元が……
放たれているのを……
感じることができるのでございます……
これほどまでに勢いのあるものなのですね……」

「っ!!!くっ!!!お、おかしい……
何度も出してるのに……オルソラのマンコでなら、
もっと出せそうだ!!!」

出し終えても、まだ残尿感のように、
あわい射精の感覚がペニスにまどわりつく。
すぐに腰を動かし、
この違和感の元をペニスの中から吐き出したくなるのだった。

「おおっ……!!
遠慮なさらず、存分に出し尽くしてください……
私がかんじている背徳も……んっ!!!
何もかもを忘れるほどに……激しくっ!!!」

一体何度出しただろうか。膣は十分以上の精液で満たされ、入り切らなくなった分は、びちゃびちゃと二人の体にふりかけた。

汗と精液と、二人の膣から溢れ出す蜜の匂いで部屋は満たされていた。

「はあ……ああ……も、もう出な……」
当麻はくたくたに疲れきっている。
どころんでも、
一滴の精液も出ないだろう。

「ああ……二人揃ってすっかりあなた様のものになってしまいました……」

「ふにゅ……も、もう勤弁してください……
あかひゃん産む……が、らあ……産むか……」

オルソラの後に再び幾度かの
射精を受けたアニエーゼは、
壊れた機械のように、同じ言葉を繰り返していた。

「今日は……さすがにもう……打ち止めた」

「それは残念です……ですが、
今日はほんとうに素晴らしい日でした。
こんなにも素敵な体験を
することができたのですから……」

「それは……よかったよ……」

「明日からこのすばらしい日々が続くかと思うと……
明日が待ちきれなくなってしまいます……」

「はは……俺の身体……いつまで保つか……」

上条当麻は、
それを最後の言葉にバタリと倒れ、
気を失った。

「ひぎっ!! いやっ!!
す、吸い付かないでっ! くださっ!!!」

「んぐ……んも……ん」

アニーゼをしっかりと抱きしめ、
ペニスを膣に突っ込みながら、
胸にちゅううつと、
音を立てて吸いつきながら
乳首に歯を立てる。

「あ、あとでせった!……
いひっ!!
ぶっころしてやりまっ……
んぎっ!!」

「おっかしいなあ……んむっ、
一度出たんだから…
もうちょっとスムーズにつ……ずにゆゆっ!!
出てもいいんだけどなあ……
こんなにふんぶん臭っているのに……
ちゃんとマッサージしてるのか?
サボっちゃダメたぞ……!」

アニーゼの言うことを無視して、
当麻は胸をしゃぶり続ける。

臨月を迎え、出産間近となったアニーゼ。
母乳はなんとか出るようになったものの、
またまたその出は良いとは言えなかった。

「はぐうっ!! やっ!! らあ!!!」

「ほらほら、出し惜しみしないで……
出しちゃえよっ! それとも……これが足りないのか?」

乳首をさらに口に含みながら、膣の中のペニスを突き上げる。
小さな体の膣内で、すぐにペニスの先端は子宮の入口を押し上げた。

「んぎっ!! いやあっ!!
あ、赤ちゃんびっくりする……
そ、そんなんじゃっ……
でませっ!! んぎいっ!!!」

「いやいや出るからな!! ほらほらっ!!
もっと気持ちよくなれよっ!! オマンコ気持ちよくなれば、
胸も緩んでくるたろっ!! ほらっ!!!」

「はうっ!! ンぐううっ!!!」

ひくひくっと、膣が痙攣し始める。
と、アニーゼの身体がびくんっ! とひときわ大きく跳ねた。

十
「あゝひっ!! ひやっ!?!」
アニーゼが絶頂する。

「おっ……イッたのか?なら……」
ここぞとばかりにきゅううっと、乳首にを強く吸いつく。

「いゝやゝっ!! イッてるがらあぁっ!!!」
びくびくんと体が震え、
本能的にアニーゼはきゅっと
強く当麻に抱きつく。

「はあ……へあっ!?!
く、くる、なにかがあ……」

胸にじわじわっと、
熱いものが広がる。
と思ったら、
それは次第に硬い突起に集中する。

「うはっ!?! 出たてだ!?!」

ダムが決壊するかのよう
いままでいくら吸っても一滴も
漏らすことのなかった乳首が、
母乳が吹き出し始めた。

「ひゃああ……おっぱいでりゅ……
はざい……」

もはや最も敏感な性感帯のひとつと化した乳首を吸われ、
快楽に悶える。

「んくっ……ほーら、
言ったとおりだろ? ンぐっ、ごくごくっ」

母乳をゴクゴクと、胃の中に流し込みながら当麻はさらに母乳を求めるために、
乳首を甘噛みする。

「ああ、母乳を飲みながら……膣内をこするのは最高だ……」
「んあっ!!」

母乳を吸われるたびに、膣がきゅっと締められ膣内をうごめく
ペニスの形をはっきりと意識せざるを得なくなる。
再び下半身は熱くなり、じわじわっと、体の中を悦楽の波が押し寄せた。

「んくっ……まだまだ薄いけど
おいしいぞ……間違い赤ちゃんも気に入るな」

「ひゃああ……やらあっ……そんなにのんじゃ、
赤ちゃんの分が、なくなっちゃ……!!!」

「ははっ……今出なくなるまで出したからって、
母乳はどんどん後から作られるから大丈夫だって!!!」

身体をすっかり虜にされ、わずかに残る意思が示した言葉でもって、もはやかなわなかった。

「はぐうっ!! ま、また……吸われて……イグっ!! ううんっ!!!」

絶頂の余韻に身を震わせながら、
アニーゼは必死に当麻の身体にしがみつくとどしができなかった。

十
「あゝひっ!! ひやっ!?!」
アニーゼが絶頂する。

「おっ……イッたのか?なら……」
ここぞとばかりにきゅううっと、乳首にを強く吸いつく。

「いゝやゝっ!! イッてるがらあぁっ!!!」
びくびくんと体が震え、
本能的にアニーゼはきゅっと
強く当麻に抱きつく。

「はあ……へあっ!?!
く、くる、なにかがあ……」

胸にじわじわっと、
熱いものが広がる。
と思ったら、
それは次第に硬い突起に集中する。

「うはっ!?! 出たでた!?!」

ダムが決壊するかのよう
いままでいくら吸っても一滴も
漏らすことのなかった乳首が、
母乳が吹き出し始めた。

「ひゃああ……おっぱいでてりゅ……
はざい……」

もはや最も敏感な性感帯のひとつと化した乳首を吸われ、
快楽に悶える。

「んくっ……ほーら、
言ったとおりだろ? ンぐっ、ごくごくっ」

母乳をゴクゴクと、胃の中に流し込みながら当麻はさらに母乳を求めるために、
乳首を甘噛みする。

「ああ、母乳を飲みながら……膣内をこするのは最高だ……」
「んあっ!!」

母乳を吸われるたびに、膣がきゅっと締められ膣内をうごめく
ペニスの形をはっきりと意識せざるを得なくなる。
再び下半身は熱くなり、じわじわっと、体の中を悦楽の波が押し寄せた。

「んくっ……まだまだ薄いけど
おいしいぞ……間違い赤ちゃんも気に入るな」

「ひゃああ……やらあっ……そんなにのんじゃ、
赤ちゃんの分が、なくなっちゃ……!!!」

「ははっ……今出なくなるまで出したからって、
母乳はどんどん後から作られるから大丈夫だって!!!」

身体をすっかり虜にされ、わずかに残る意思が示した言葉でもって、もはやかなわなかった。

「はぐうっ!! ま、また……吸われて……イグっ!! ううんっ!!!」

絶頂の余韻に身を震わせながら、
アニーゼは必死に当麻の身体にしがみつくとどしができなかった。

「はあっ!! はっ! そろそろ俺もイクぞっ!! おっぱいをくれたお返しをしなくちゃな……ぞらっ! しっかり受け取れよっ!!!」

「はぐっ……はうっ!? ふうンンッ!!!」

蜜でたっぷり濡り気を帯びた膣内はロージョンを塗りたくったかのように、きつく締め付けながらも、抵抗を感じさせず、欲望の赴くままにペニスをかき回すことを可能にしていた。

「うくっ……相変わらず、アニーゼの膣内は最高だ……よしっ……!! 出すぞ!!!」

ほどなく、当麻はアニーゼの膣内に精液を解き放つ。

「ま、またあ……イグッ!!
イグううんっ!!
んんん~!!!」

熱いほとばしりを下半身に受け、アニーゼの身体からついにはだらりと力が抜けた。

「おっと! あぶない……ンっ!! まだまだ出るぞ……!」

崩れ落ちる体を支えながら、しっかりとペニスを膣の奥に固定したまま、さらに射精を続ける。

「あうっ……へあん……!」

「おっ!! お前のオマンコも離す気はないようだぞ? しっかり啜え込んでな!」

全体からガラッと力は抜け、顔は緩みきっていた。そんな状態でも、膣の中だけは逆らうかのようにきゅううっと、きつくペニスに食らいつき貪欲にペニスを膣内に引きとめようとするのだった。

「はへあ……やらっ……
わらし……ごんなっ
は、はひたな……んぐうっ!!!」

再び、びくびくっと体が震える。

「まだ、しゃべる余裕があるのか……その生意気な口が聞けなくなるくらいに、気持ちよくしてやるぞ!!!」

「はぐう……ンン……!!!」

ほどなく、アニーゼの頭の中は真っ白な光に包まれていくのだった。

「はあっ!! はっ! そろそろ俺もイクぞっ!! おっぱいをくれたお返しをしなくちゃな……ぞらっ! しっかり受け取れよっ!!!」

「はぐっ……はうっ!? ふうンンッ!!!」

蜜でたっぷり濡り気を帯びた膈内はロージョンを塗りたくったかのように、きつく締め付けながらも、抵抗を感じさせず、欲望の赴くままにペニスをかき回すことを可能にしていた。

「うくっ……相変わらず、アニーゼの膈内は最高だ……よしっ……!! 出すぞ!!!」

ほどなく、当麻はアニーゼの膈内に精液を解き放つ。

「ま、またあ……イグッ!!
イグううンッ!!
んんん~!!!」

熱いほとばしりを下半身に受け、アニーゼの身体からついにはだらりと力が抜けた。

「おっと! あぶない……ンっ!! まだまだ出るぞ……」

崩れ落ちる体を支えながら、しっかりとペニスを膈の奥に固定したまま、さらに射精を続ける。

「あうっ……へあん……」

「おっ!! お前のオマンコも離す気はないようだぞ? しっかり喰え込んでるな」

全体からガラッと力は抜け、顔は緩みきっていた。そんな状態でも、膈の中だけは逆らうかのようにきゅううっと、きつくペニスに食らいつき貪欲にペニスを膈内に引きとめようとするのだった。

「はへあ……やらっ……
わらし……ごんなっ
は、はひたな……んぐうっ!!!」

再び、びくびくっと体が震える。

「まだ、しゃべる余裕があるのか……その生意気な口が聞けなくなるくらいに、気持ちよくしてやるぞ!!!」

「はぐう……ンン……!!!」

ほどなく、アニーゼの頭の中は真っ白な光に包まれていくのだった。

「アンジェレネ、まだ見えないか？」
「は、はい……まだです！！」

「んっ……くうう……」

破水を確認して、水中に入っただけの出産。
だが、小さな体ゆえが
なかなか赤ちゃんの頭が出てこない。

予想外に時間が、かかっていた。

「くそっ！！これならどうだっ！？」
思い切って俺は自分のペニスを尻の穴に挿入した。

「はぐうっ！？ な、なにをしゃがるんですかっ！！
今はそんなこと……はうんっ！？」

「はやくしないと赤ちゃんだって体力を
使い果たしてしまおうし、お前ものぼせるだろう？」

「だ、だからって……こんなときにお尻に……」
はうっ！！うごかしちゃっ！！ た、だめでっ！！」

アニーゼのいうことを振り切り、
腰を振って尻の中をペニスでかき回す。

「ほらっ！！こうするとお前、よくお漏らしするじゃないか！
これなら、赤ちゃんも出やすくなるんじゃないか？」

「はぐっ！！ そ、それは別のところでしょう！？
ひっ……いやあっ！！」

「ついでに……こうすればっ！！」

膣口のをきに手を添え、めいっばいに左右へと開く。

「んぎいっ！！ ひい……広がってる！！
「どうだっ……出やすくなったか？」

アナルの中をさらにかき回していると、
ペニスにもものすごい圧迫感が襲ってきた。

「うおっ！！おお、赤ちゃんが降りてきているのが……
伝わってくる！！」

「あ、ああっ！！見えてきましたよ！！」

「そうかっ！！」

赤ちゃんの頭がついに外に現れ始めた。

「はあ……はあ……な、ならさっさと……ふっ……！！
んぐううっ！！やあああっ！！
ぬ、抜いっ！！んぎいっ！！」

アナルを犯されたままのアニーゼが叫び声をあげた。

「アンジェレネ、まだ見えないか？」
「は、はい……まだです！！」

「んっ……くうう……」

破水を確認して、水中に入っただけの出産。
だが、小さな体ゆえが
なかなか赤ちゃんの頭が出てこない。

予想外に時間が、かかっていた。

「くそっ！！これならどうだっ！？」
思い切って俺は自分のペニスを尻の穴に挿入した。

「はぐうっ！？ な、なにをしゃがるんですかっ！！
今はそんなこと……はうんっ！？」

「はやくしないと赤ちゃんだって体力を
使い果たしてしまおうし、お前ものぼせるだろう？」

「だ、だからって……こんなときにお尻に……」
はうっ！！うごかしちゃっ！！ だ、だめでっ！！」

アニーゼのいうことを振り切り、
腰を振って尻の中をペニスでかき回す。

「ほらっ！！こうするとお前、よくお漏らしするじゃないか！
これなら、赤ちゃんも出やすくなるんじゃないか？」

「はぐっ！！ そ、それは別のところでしょう！？
ひっ……いやあっ！！」

「ついでに……こうすればっ！！」

膣口のをきに手を添え、めいっばいに左右へと開く。

「んぎいっ！！ ひい……広がってる！！
「どうだっ……出やすくなったか？」

アナルの中をさらにかき回していると、
ペニスにもものすごい圧迫感が襲ってきた。

「うおっ！！おお、赤ちゃんが降りてきているのが……
伝わってくる！！」

「あ、ああっ！！見えてきましたよ！！」

「そうかっ！！」

赤ちゃんの頭がついに外に現れ始めた。

「はあ……はあ……な、ならさっさと……ふっ……！！
んぐううっ！！やあああっ！！
ぬ、抜いっ！！んぎいっ！！」

アナルを犯されたままのアニーゼが叫び声をあげた。

「あっ！！アニーゼ様……どんどん頭が出てきますよ！！」

「はぐうっ……う”う”んっ！！」

アニーゼはびくびくっと震えながらも一生懸命に耐えている。

「アンジェレネ……よく見ておけよ。
おまえも、生理が来たらすぐに同じように、
赤ちゃん産ませてやるからな！！」

「あっ……は、はい そのときは、お願いします！！」

「あぐうう…… こ、こんなとき……にっ！！
私以外の話を……するなってんですっ！！よう……ンン！！」

「あ、ああ……悪い悪い。ほらっ！！これでいいだろっ！！」

腰を振り、アナルの中をペニスでかき回す。さすがに、
油断しているとすぐに抜けそうになるが、
その圧力は今までにないほどすさまじいものだった。

「あっ！頭が完全に出来ました！！ ひっぱり出しますよ！！」
ぐっぐっ、ペニスにかかる圧力で、抜いている様子がかがいが知れた。

「おおっ！ くうっ……！！」

ふと、ペニスにかかっていた圧力がふっとなくなり、
思わず腸内の奥深くへペニスを押し込んでしまう。

「よしっ……アニーゼ、腸内へ出すぞっ！！」

「んぎっ！！ いやっ！！
赤ちゃん出てる最中だから……だめえっ！！」

限界に近かったペニスを乱暴に腸内でかき回す。
すぐに限界まで達し、精液を中に放出する。

「もうちょっとで、赤ちゃん全部出ます……それっ！！」

「ひぐっ!? くう”う”う”っ！！ ひゃあああんっ！！」

尻への射精と赤ちゃんを引っ張り出すときの膣壁をこすったときの
刺激により、アニーゼは絶頂してしまった。

「はぐう……やっ……やああ……へう！！」

いつのまにか胸からは出産を喜ぶかのように
母乳を吹き出していた。

「あっ！！アニーゼ様……どんどん頭が出てきますよ！！」

「はぐうっ……う”う”んっ！！」

アニーゼはびくびくっと震えながらも一生懸命に耐えている。

「アンジェレネ……よく見ておけよ。
おまえも、生理が来たらすぐに同じように、
赤ちゃん産ませてやるからな！！」

「あっ……は、はい そのときは、お願いします！！」

「あぐうう……こ、こんなとき……にっ！！
私以外の話を……するなってんですっ！！よう……ンン！！」

「あ、ああ……悪い悪い。ほらっ！！これでいいだろっ！！」

腰を振り、アナルの中をペニスでかき回す。さすがに、
油断しているとすぐに抜けそうになるが、
その圧力は今までにないほどすさまじいものだった。

「あっ！頭が完全に出来ました！！ ひっぱり出しますよ！！」
ぐっぐっ、ペニスにかかる圧力で、抜いている様子がかがいが知れた。

「おおっ！ くうっ……！！」

ふと、ペニスにかかっていた圧力がふっとなくなり、
思わず腸内の奥深くへペニスを押し込んでしまう。

「よしっ……アニーゼ、腸内へ出すぞっ！！」

「んぎっ！！ いやっ！！
赤ちゃん出てる最中だから……だめえっ！！」

限界に近かったペニスを乱暴に腸内でかき回す。
すぐに限界まで達し、精液を中に放出する。

「もうちょっとで、赤ちゃん全部出ます……それっ！！」

「ひぐっ!? くう”う”う”っ！！ ひゃあああんっ！！」

尻への射精と赤ちゃんを引っ張り出すときの膣壁をこすったときの
刺激により、アニーゼは絶頂してしまった。

「はぐう……やっ……やああ……へう！！」

いつのまにか胸からは出産を喜ぶかのように
母乳を吹き出していた。



「わあ……出ましたよ！
見えますか……？アニーゼ様！」

「はぐ……ンうんっ！！わ、わ、だ、し、の
あかちゃ……ひぐっ！！ひイン！！」

まだ軽くいきながらも、アニーゼは目を見開き、
しっかりとわが子を目に焼き付けた。

「はう……あ、赤ちゃんでいくなんてえ……
な、なんてことをしやがるんですかあ……」

「なんだ？よかったか？なら、
このまま……胎盤が出る時もやってやるうか？」


再びアナルの中のペニスを前後に動かす。

「ひうっ！！？も、もういいです！いやあっ！！」

身体をびくびくと痙攣させる。
いったばかりの敏感な身体は、
面白いほどに何度も何度も絶頂を繰り返すのだった。

「おお、おっはいよく出るなあ……
やっぱり出産したのが効いたか？」

胸からは止めどなく母乳が吹き出し続けていた。



「わあ……出ましたよ！
見えますか……？アニーゼ様！」

「はぐ……ンうんっ！！わ、わ、だ、し、の
あかちゃ……ひぐっ！！ひイン！！」

まだ軽くいきながらも、アニーゼは目を見開き、
しっかりとわが子を目に焼き付けた。

「はう……あ、赤ちゃんでいくなんてえ……
な、なんてことをしやがるんですかあ……」

「なんだ？よかったか？なら、
このまま……胎盤が出る時もやってやろうか？」

再びアナルの中のペニスを前後に動かす。

「ひうっ！！？も、もういいです！いやあっ！！」

身体をびくびくと痙攣させる。
いったばかりの敏感な身体は、
面白いほどに何度も何度も絶頂を繰り返すのだった。

「おお、おっはいよく出るなあ……
やっぱり出産したのが効いたか？」

胸からは止めどなく母乳が吹き出し続けていた。

「んはあんっ!! こ、こんなことだめなのに……
なんでこんなにっ……気持ちがいいの!？」

「ま、まさかこんなことになるなんて……」

「肩を揉むのうまいんだぜ……」と、
ただ自分の特技を披露するだけのつもりだったのに、
無防備になったところを我慢できずに襲いかかってしまった……

そのとき、吹寄制理のなかにとでつもなく巨大な
抑圧されていたものがあつたことを知ってしまったのが、
すべての始まりだった。

「ふあっ……これは子づくりよっ!!……
子作りなの……気持ちいいのは……2次的な副産物……
感じようが、感じまいが、同じことなのっ!
ふあっ……ああんっ!!」

淫らな欲望を開放したからと言って、誰とでも身体を重ねるわけではない。
初めてを奪った男、上条当麻と添い寝げると決めていた。

「んはあっ……は、早く……精液出さないっ!!
腫出ししないと、赤ちゃんできないじゃないっ!!
でないと、ただ気持ちいいからセックスしているだけになるでしょっ!!」

「こ、こんなに積極的になるなんてな……
あの三人、いや、学校中の人間がこんなこと信じないよな……はは」

「ちゃんとこっちに集中しろ!上条当麻っ!!
ああ……こんな男が旦那になるなんて……最低だけど……
もうしかたない……んああっ!!」


自ら積極的に腰を振り、食欲に快楽を求める。

指が喰い込むほどに胸を握り潰す、じわじわと感じる痛みさえも、
快感を増幅するスハイスへと変える。

「うはっ!! くうっ……し、搾り出されるみたいだ……!!」

膣はぴったりとペニスに吸いつき腰が振られるたびに
精液を搾り取るうとするかのようにきゅうとしめつけた。





「うわっ！！ でも、もう我慢できなっ……出る！！」
あっという間にペニスは欲望の塊を膣の中へと放出した。

「あっ……はあっ！！ 子宮に精子きたのお
子作りだから……わたしも、いつでもいいの……
ああんツ！！」

ぶるぶると、体を震わせ、今まで我慢していたタガを解き放つ。

「ま、まだ激しくなるのか？ ちょっ……まだイったばかりで敏感なんだから……！？」

「はあっ……イクっ！！イクう！！ はまだ……まだ足りないっ……」

当麻の言葉はもはや耳に入らないといった感じで無我夢中で腰を振り続けた。

「んああ～！！ 熱い……身体中に血が巡って……とっても気持ちいいわっ！！」

振動を受け、揺れる巨大な胸は身体から引きちぎれるのではというくらいにひっぱられるが、
押し寄せる快樂の波に用意に打ち消されて気にも止まらない。

「んはっ！！ また……出る！！」

2度目の精を膣の中に放つ。

「はああ……子づくり楽しいっ……ああっ！！
もっと……もっと気持ちよくなるう……」

射精するのもお構いなしに、ただ自分の快感のためにペニスを利用する。
その代償は、お腹に子を宿すことだったとしても、決して高いものではなかった。



「うわっ！！ でも、もう我慢できなっ……出る！！」
あっという間にペニスは欲望の塊を膣の中へと放出した。

「あっ……はあっ！！ 子宮に精子きたのお
子作りだから……わたしも、いつでもいいの……
ああんツ！！」

ぶるぶると、体を震わせ、今まで我慢していたタガを解き放つ。

「ま、まだ激しくなるのか？ ちょっ……まだイったばかりで敏感なんだから……！？」

「はあっ……イクっ！！イクう！！ はまだ……まだ足りないっ……」

当麻の言葉はもはや耳に入らないといった感じで無我夢中で腰を振り続けた。

「んああ～！！ 熱い……身体中に血が巡って……とっても気持ちいいわっ！！」

振動を受け、揺れる巨大な胸は身体から引きちぎれるのではというくらいにひっぱられるが、
押し寄せる快樂の波に用意に打ち消されて気にも止まらない。

「んはっ！！ また……出る！！」

2度目の精を膣の中に放つ。

「はああ……子づくり楽しいっ……ああっ！！
もっと……もっと気持ちよくなるう……」

射精するのもお構いなしに、ただ自分の快感のためにペニスを利用する。
その代償は、お腹に子を宿すことだったとしても、決して高いものではなかった。



「ん？ 何やってるんだ？自分で胸なんか揉んで……もしかして欲求不満か？」

「んなっ！！ ばかじゃないのっ！！ 見てわからないの？これは、母乳マッサージだ！」

「へ？母乳って赤ちゃんを産めば勝手に出るんじゃないのか？」

「そうとも限らないわ。だから、こうして出産前に出やすくしないとイケないのよ！！」

大きな胸を自分でせつせと揉みほぐしている姿は、なかなか大変な作業に見えた。

「よーし、俺にも手伝わせてくれよ！ いいだろ？」

「んなっ！！、 ひゃあん！！」

さらけ出された豊かな双乳に手のひらを包み込むようにのせる。

「ま、まあ……貴様にも責任はあるんだから……
ちょっとは手伝わせても、いいかもしれないわね。
じゃあまずは……」

「ああ、バッチリ手伝ってやるぞ。ほら……
レロレロ……」

舌を這わせ、口の中で乳首を転がす。
ちゅっちゅつと、
赤ちゃんがしゃぶりつくように乳首に吸い付く。

「ひゃあんっ！！ それって……
貴様が、いつもやってることじゃないの！！
そうじゃなく……説明を聞きなさいって……」

「おっ！！ これは……」
「な、なに！？」

スンスンと、鼻を鳴らして乳首の周りの匂いをかぐ。

「ミルクの臭いがする……
こりゃ、もうそろそろ出るんじゃないか？
どうすると出たりして……」

牛の乳搾りのように乳首の周囲から中心に向かって
ぎゅっぎゅとしごいていく。人間だろうが、牛だろうが、
乳を出すことには変りないのだから、出るのではなからうか。
そう確信を持って、当麻はしごき続けた。

「んくっ……はあんっ！！ ちょ、ちょっと……」
「どうだ？出そうか？」

「はうん……ば、バカ！！ こ、こんな、いつもの愛撫と……
かわらないんじゃ！！でるわけなっ！！」
「そうかあ？ スンスン……おっ！！なんかミルクの香りが強くなって来てないか？」

乳首からいっそう濃いミルクの香りが漂う。
「はぐうっ！？ あっ……なんか……ムズムズする！？」

吹寄制理の乳首にぶつぶつと、白い液体が吹き出し始めていた。



「わぶっ!? おおっ!?」

「やっ…いやあっ!!こんなことって……」
せきを切ったように2つの乳首からは母乳が溢れ出した。

「やったぞ! ほらほらっ!!ははっ、面白いな、これ!!」

手がぎゅっと胸に圧力を加えるたびに、
それにきちんと反応してびゅーっと、乳首からは母乳が吹き返してくる。

「ほらっ!!うまきいっただろ?んぐっ…… ごくごくっ」

乳首に吸いつき、音を立てて溢れ出す母乳を飲み下す。

「はぐっ……うそお……やっ、出ちゃってるう!!
こ、こんなに出るなんて……」

「おお……うまいぞ、吹寄!!ほら、お前も飲んでみるよ!!」
母乳は、吹寄制理自身の顔にも降りかかり、自分自身の母乳を味わうこととなる。

「はぶっ……んぐっ! コクンっ!!ああ……ミルクの味」

「そうだろ?」

「ま、ママになるう……わたしの身体……赤ちゃんのものになってゆくんだ……」

自分自身から放たれた母乳を口に含み、
味を確かめた吹寄制理は、
自分の体の変化に戸惑いながらもそれを事実として受け入れていくのだった。



「っ……あん……で、出るわ……」

先端の突起の疼きが、さあっと胸の膨らみ全体に散らばってゆく。

「おっ……」

「ほ、ほら飲みなさいよ！！ちゃんと受け止めなさい！！
こぼしたら承知しないわよ！！」

乳首からじわじわっと母乳が漏れ出し始める。
指でぐっと乳首を押しこめばそれは勢い良く
シャワーのように噴出する。

「ふわっぶ！？ あいかわらずっ……ぐっ！！
勢いがすごいなあ……」

「しゃ、しょうがないでしょ！？
出始めたら、止まらないんだから！！」

何もしなくとも次から次へ、勝手にぼたぼたと垂れ落ちる。

「ちゃ、ちゃんと口に入るようにしてくれよ！！」

「そんなこと……わ、わかってるわよ！！
んっ……どう？」

狙いを当麻の口に定め、母乳を押し出す。

「ぶあっ！！ あぶ……」

「あはっ……うまいじゃないの……ほーら、ほら！！」

口に注がれる母乳を懸命に飲み下す。
飲みきれずにこぼしてしまうこともあるが、
かまわず吹寄は勢いをなくすまで母乳を浴びせ続ける。

「んぐっ…ヨクン…はあ……日に日に味が濃くなってる気がする……
これなら、赤ちゃんも喜んで飲むだろうな……」

「……ふんっ！！もし、赤ちゃんが生まれたら、もう貴様の方は……
無いんだから！！ それに、今日はもう終わりよ！！」

「そ、そんなあ……つれないこと言うなよ……
ほら、飲んだミルク分はお返したってするからさ……ふっ!!そらっ!!!」

腰をリズムカルに振り、膣壁でペニスをこすりあげ射精を促し始める。

「ひゃんっ!!? だ、だめよっ!!んあっ!!!」
すぐに膣から蜜がペニスに纏わりはじめ、ひくひくっと、収縮を始めた。

「ハアン……これは……しかた……ないんだから……こいつが、盛ってるだけなッ!!!」

じわじわと熱いものがペニスの先端から込み上がる。

「ほらっ!!返すぜっ!!受け取れ!!!」

膣の中でペニスの先端がぶくつと膨張する。
次の瞬間あつという間に膣の中は精液で溢れがえった。

「んあっ!!やああっ!!ひイン!?!」

熱いほとぼしりを受け、軽い絶頂が臨月の身体を通り抜ける。
ほこっと、お腹の赤ちゃんが腹を押し返した気がした。

「はぐっ……あっ……はアン……
気持ちよすぎで……っ!! ためになる……う」

「なあ……これは……どうだ?」

射精しながら、
ペニスの先端で子宮の入口をつんつんっと小突く。

「そ、そんなに、突くなあッ!! んくっ、ふあああっ!!!」

押し込まれるたびに、背筋に電流がほとぼしり、
膣壁がぎゅうっと、ペニスに絡みついた。

「なあ、赤ちゃんが生まれたあとも、
俺におっぱいしてくれないか? いいたるっ!?!」

「わ、わかったあ……
あげるからっ!! もうこれ以上気持ちよくなると……
ひいっ……!?!おがひく……なるうっ!!!」

めいっばいに膣の中をペニスがかき回すと、
吹寄の身体はひくひくんっと、
当麻の上で踊るかのように跳ね上がるのだった。



「っ……あん……で、出るわ……」

先端の突起の疼きが、さあっと胸の膨らみ全体に散らばってゆく。

「おっ……」

「ほ、ほら飲みなさいよ！！ちゃんと受け止めなさい！！
こぼしたら承知しないわよ！！」

乳首からじわじわっと母乳が漏れ出し始める。
指でぐっと乳首を押しこめればそれは勢い良く
シャワーのように噴出する。

「ふわっぶ！？ あいかわらずっ……ぐっ！！
勢いがすごいなあ……」

「しゃ、しょうがないでしょ！？
出始めたら、止まらないんだから！！」

何もしなくとも次から次へ、勝手にぼたぼたと垂れ落ちる。

「ちゃ、ちゃんと口に入るようにしてくれよ！！」

「そんなこと……わ、わかってるわよ！！
んっ……どう？」

狙いを当麻の口に定め、母乳を押し出す。

「ぶあっ！！ あぶ……」

「あはっ……うまいじゃないの……ほーら、ほら！！」

口に注がれる母乳を懸命に飲み下す。
飲みきれずにこぼしてしまうこともあるが、
かまわず吹寄は勢いをなくすまで母乳を浴びせ続ける。

「んぐっ…ヨクン…はあ……日に日に味が濃くなってる気がする……
これなら、赤ちゃんも喜んで飲むだろうな……」

「……ふんっ！！もし、赤ちゃんが生まれたら、もう貴様の方は……
無いんだから！！ それに、今日はもう終わりよ！！」

「んっ……わ、わかってるわよね……」

恥ずかしそうに咬寄制理は上条当麻の上に腰を下ろした。

「んくっ!! はあ……入って、きたあ」

ペニスが膣の中に入り、下半身は自ずと熱を帯び始める。
胸がじくじく疼きたしてくるのを感じていた。

「……ああ、わかってるよ。
今日のを始めよう。母乳マッサージを……な」

「じゃ、じゃあ……ちゃんと飲みなさいよね!!
こ、これは……味のチェックとマッサージ……
私はエッチじゃない……エッチじゃ……」

ぶつぶつと、自分に暗示をかけるようにつぶやきながら、
当麻の上で母乳マッサージを始める。

母乳が出るようになったとはいえ、それでいいわけではない。
乳頭や乳輪部分に母乳がたまって出が悪くなることを防ぐため、
適度に母乳は出しつつけることが必要なのだ。

「いつでも、いいぞ…… ンあ」

回を大きく広げ
いつ母乳が出てもいいように身構える。

「ん……あ、あれもやりなさいよ……貴様が手伝ったほうが、
そのほうがよく出るんだから……」

「ははっ……じゃあ、いつものように……
出しやすいように手伝ってやるかっ!!!」

腰を上下にゆすり出す。

「ン……はあん……
これよ。これがこないとお……!!!」

すでに膣内は彼女の出す愛液でドロドロで、
苦もなく奥にある子宮口をペニスの先端が押し込む。
鈍い痛みがそこから生じ、ぶるぶると体を震わせる。
やがてほかほかとした熱が下半身からじわじわと全体に広がる。

「ふあっ! はあんっ!!」

当麻の突き上げを受け、ぶるぶると胸を揺らしながらも、
乳首をしごき、母乳を搾り出し始めた。

「おっ……頭のでっぺんが見え始めたぞ!!」

「うんっ!! はあっ……
ま、まだ やっと見えただけ……なの!?」

「あ、ああ……」

「そ、そう くら……んっ!!」

頭のでっぺんが見えた! と思ったら、
また奥へと引っ込んだり……
というもどかしい状態が幾度か続く。

「はあ～……はあ～……
んぐっ!!んっ……はあ……」

吹寄制理は乱そうになる呼吸を必死に整え、
じっくりと息を潜める。

まだまだ先は長い。間隔の短くなっていく陣痛に、ただひたすら耐え、
その時を待っているのだった。

「おおっ……なんだか、あまりひっこまなくなったような……」

膣口の入り口が徐々に大きく開き始め、頭も奥へと引っ込むのをやめ、
徐々にせり出し始めてくる。

「よーし、出てくるぞ!!」

「わ、わかってるわ……!!
それよりも、受けとりそこなうようなへまはしないでよ……!!」

陣痛感覚が更に短くなり、股間は引き裂かれそうな痛みに襲われる。

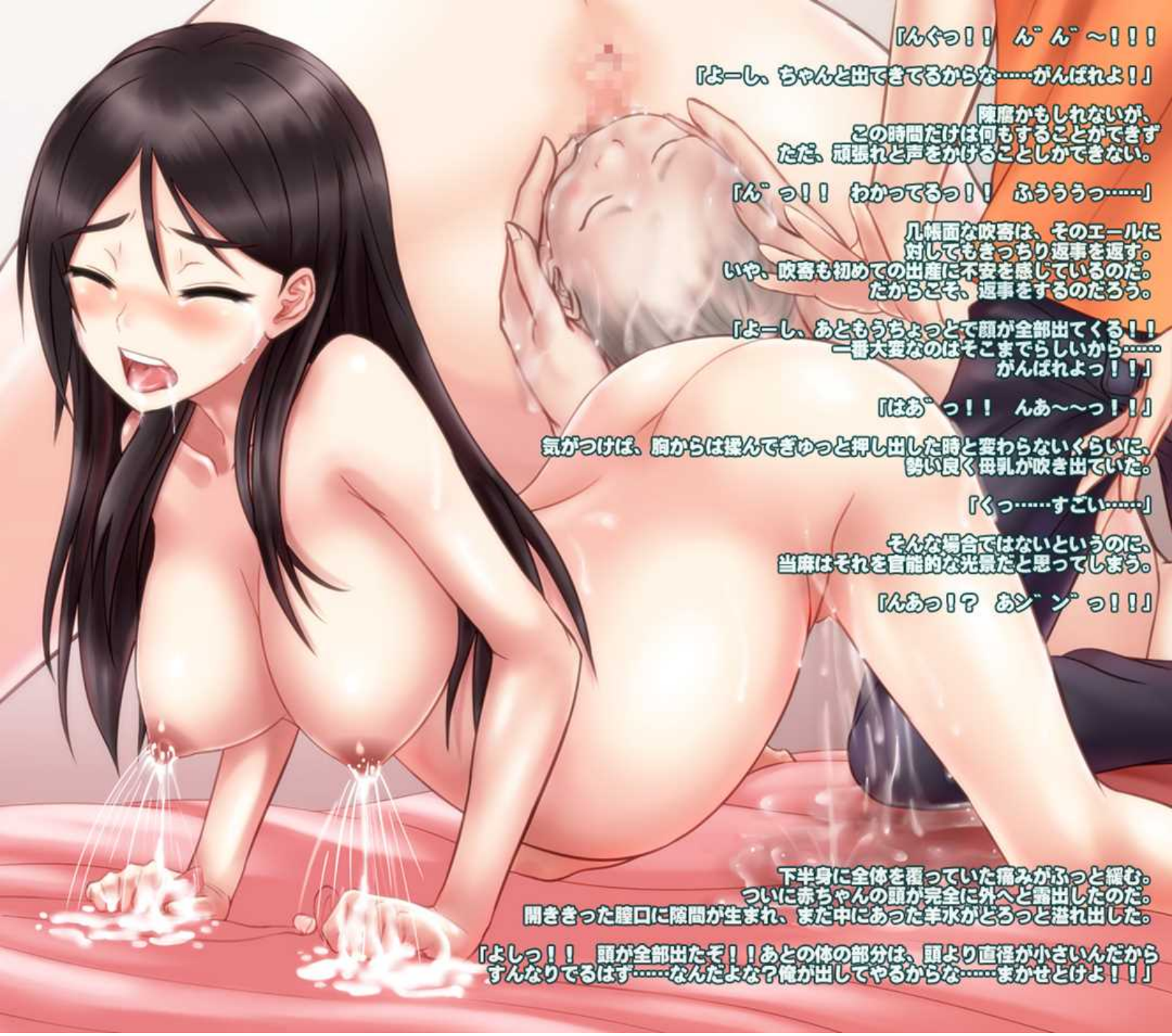
「ああ……まかせろ!!」

「んっ…… ああ～～っ!!」

陣痛に合わせいきむ。下半身に力を込めるたびに、
徐々に赤ちゃんの頭部はその全体を外気に晒し始めた。

「おおっ……」

ふと吹寄の胸を見れば、両乳首からは、
まるで赤ちゃんを待ちわびるかのように止めどなく母乳が垂れ始めていた。
普段揉み過ぎたせいで、何かしらの刺激が加わるとすぐに
母乳を吹き出すようになっていたのだった。



「んぐっ!!! んん~!!!」

「よーし、ちゃんと出てきてるからな……がんばれよ!!」

陳腐かもしれないが、この時間だけは何もすることができずただ、頑張れと声をかけることしかできない。

「んっ!!! わかってるっ!!! ふうううっ……」

几帳面な吹寄は、そのエールに對してもきっちり返事を返す。いや、吹寄も初めての出産に不安を感じているのだ。だからこそ、返事をするのだろう。

「よーし、あともうちょっとで顔が全部出てくる!!!
一番大変なのはそこまでらしいから……
がんばれよ!!!」

「はあっ!!! んあ〜っ!!!」

気がつけば、胸からは揉んでぎゅっと押し出した時と変わらないくらいに、勢い良く母乳が吹き出していた。

「くっ……すごい……」

そんな場合ではないというのに、当麻はそれを官能的な光景だと思ってしまう。

「んあっ!? あんげっ!!!」

下半身に全体を覆っていた痛みがふっと緩む。ついに赤ちゃんの頭が完全に外へと露出したのだ。開ききった膣口に隙間が生まれ、また中にあった羊水がどろっと流れ出した。

「よしっ!!! 頭が全部出たぞ!!! あとの体の部分は、頭より直径が小さいんだからすんなりでるはず……なんだよな? 俺が出してやるからな……まかせとけよ!!!」

「よし……こうやって……と」

赤ちゃんの首を横から包み込みまずは片方の肩を出すように傾ける。
思いの外すると、片方の肩が抜け出す。

「っ！！ はうん……」
「よしっ……今度は反対を……」

同じ要領で反対の肩を出すと、
あとはへその緒が引っかかって抵抗がないか確かめつつ、
慎重に引っ張り出す。
問題ないことがわがると、
赤ちゃんに負荷がかからないようにゆっくりと外に取り出した。

頭部が出てくるまでに費やした時間までとは違い、
当麻が手伝い作業に費やした時間は驚くほど短かった。

「んあっ！！！！」

びくんと下半身が跳ね上がる。
急に赤ちゃんの分の重さが下半身から失われたためであろう。

「あ……赤ちゃん出たんだ……ふう……よかった……」

吹寄制理が実感する。
それまでは胸を大きく揺らしてしていた呼吸が、徐々に落ち着きを取り戻す。

「ほらっ！！赤ちゃん……ちゃんと出たぞ！！」
「ん……」

しっかり抱えてあげ、四つん這いのまま振り返る吹寄の視界に入るように見せてやる。

「あは……私の赤ちゃん……もっと近くで見せて」
「ああ……ほら……」

股の下をくぐらせ、吹寄の顔の下へとまだへその緒がつながったままの赤ちゃんを持っていく。

「！？ ははっ すぐにでも、おっぱいをあげられるな……」
「うっ…… い、いいでしょ？手間が少なくて済むというものよ！！」

よく見れば、吹寄の胸元にあるシーツは汗と自らの出した母乳にまみれていた。

「ふっ……くあっ！！インデックスのなか……気持ちいいぞっ！！」

「ふあっ……もうちょっと……ゆっくり！！」

腰が快感を求め本能的に動いてしまう。
並大抵のことでは、もうやめられそうもない。

「ふあっ……あんっ！！」

インデックスの口から嬌声が漏れ聞こえる

「おっ……インデックスも
気持ちよくなってきたか？」

「そんなの……わかんなっ！！」

内から生じる初めての感覚に驚き戸惑う。
これが気持ちの良いものなのだ という判別がつかないのだ。

「んん……ひゃうんっ！！」

息が乱れ……胸が上下に揺れる。

懸命に耐える姿を見ていると、
射精の感覚がこみ上げてくるのだった。

「くっ……インデックス 出るぞ！！」

「ふえっ…… あ、あっ!？」

当然のことであるかのように、
インデックスの膣内に精液を解き放つ。

「ひゃんっ……それはだめっ！！」

逃れようとするインデックスの体をしっかりと抱え込んで固定をし、
全て吐き出し終わるまでじっと同じ姿勢を維持した。

射精が終わり、ペニスが次第にしぼんでくると、
結合部分から精液がとろりと
こぼれ落ちてくるのが見えた。



-ちょっとした好奇心だった。
それが、遊びじゃすまなくなるなんてこのときは思ってもいなかった-

「こ、これでいいの？」
「よーし、ちょっと痛いかもしれないけど……
暴れるなよ……」

「え？ い、痛いの？ それならやだよ……」
「ふう……なら、やめるか……」

「え？ほんとに、やめちゃうの？
わたしは……いいんだけど」

「……」

ペニスの先端が
インデックスの陰口に触れる。

「ひゃっ！！」
「こっから先は、止められなくなるぞ……！！
俺だって、理性を保つていられるかどうか……」

びくっとインデックスは体を硬直させる。
だが、拒絶はしない。
肯定の返事と受け取り、
俺はそのまま処女膜を押し破りペニスを前進させた。

「っ！！ 痛うっ……！！」

初めての証である破瓜の血が、結合部分から流れ落ちる。

「ちょっと我慢しろよ……動く、からな」
「ん……ゆ、ゆっくり……だよ。あ、ヒヤアんっ！！」

腰を前後に動かし、ペニスを膣内の奥に送る。
「くっ……これが……」

「あっ・・ふあっつ！！な、中でうごいてるよ……」

膣内は熱くたぎっていて、熱がペニスを包み込む。
内壁が縮みつき、敏感な亀頭の先端から竿までをねっとり、
それでいてきつい締め付けが張いかかる。

途中で動かしていると、ペニスが膀胱を押しこむのだろう、
奥へと押しこむたびにびゅっびゅっとおしっこが飛び散った。

「おおっ！？」

「あっ！！ ふわわ！？
わ、わざとじゃないんだよ！
と、止まらないんだもん……！！」

懸命に足を閉じ、ペニスが奥へと
入ろうとするのを防ごうとする。
すでに膣内に入っているペニスには、
むしろ逆に心地の良い刺激を与えるだけだった。

「ふっ……くあっ！！インデックスのなか……気持ちいいぞっ！！」

「ふあっ……もうちょっと……ゆっくり！！」

腰が快感を求め本能的に動いてしまう。
並大抵のことでは、もうやめられそうもない。

「ふあっ……あんっ！！」

インデックスの口から嬌声が漏れ聞こえる

「おっ……インデックスも
気持ちよくなってきたか？」

「そんなの……わかんなっ！！」

内から生じる初めての感覚に驚き戸惑う。
これが気持ちの良いものなのだ という判別がつかないのだ。

「んん……ひゃうんっ！！」

息が乱れ……胸が上下に揺れる。

懸命に耐える姿を見ていると、
射精の感覚がこみ上げてくるのだった。

「くっ……インデックス 出るぞ！！」
「ふえっ…… あ、あっ！？」

当然のことであるかのように、
インデックスの膣内に精液を解き放つ。

「ひゃんっ……それはだめっ！！」

逃れようとするインデックスの体をしっかりと抱え込んで固定をし、
全て吐き出し終わるまでじっと同じ姿勢を維持した。

射精が終わり、ペニスが次第にしぼんでくると、
結合部分から精液がとろりと
こぼれ落ちてくるのが見えた。



「ふっ……くあっ！！インデックスのなか……気持ちいいぞっ！！」

「ふあっ……もうちょっと……ゆっくり！！」

腰が快感を求め本能的に動いてしまう。
並大抵のことでは、もうやめられそうもない。

「ふあっ……あんっ！！」

インデックスの口から嬌声が漏れ聞こえる

「おっ……インデックスも
気持ちよくなってきたか？」

「そんなの……わかんない！！」

内から生じる初めての感覚に驚き戸惑う。
これが気持ちの良いものなのだ という判別がつかないのだ。

「んん……ひゃうんっ！！」

息が乱れ……胸が上下に揺れる。

懸命に耐える姿を見ていると、
射精の感覚がこみ上げてくるのだった。

「くっ……インデックス 出るぞ！！」
「ふえっ…… あ、あっ！？」

当然のことであるかのように、
インデックスの膣内に精液を解き放つ。

「ひゃんっ……それはだめっ！！」

逃れようとするインデックスの体をしっかりと抱え込んで固定をし、
全て吐き出し終わるまでじっと同じ姿勢を維持した。

射精が終わり、ペニスが次第にしぼんでくると、
結合部分から精液がとろりと
こぼれ落ちてくるのが見えた。



ずるり……と音を立ててペニスが膣から抜け落ちる。
と同時に たっぷりと精子の含まれた精液がどろりと溢れ出す。

「うわ……私の膣内にほんとに入っちゃってるんだよ……」

身体の中から出てきた精液をじっと見つめつぶやいた。

ペニスのサイズにまでほっかり開いた膣の入り口がひくひくっと
細かく震えながらしだいに閉じていく。

「とーま……わ、わかってるのかな？こんなことすると、
赤ちゃんができちゃうんだよ！」
「おお！？ インデックスでも、
それくらいのことはわかってたのか……」

「当然だよ！！
わ、私だってそのくらいの知識は持ち合わせているんだよ！！」
「へえ……そうだったのか……
まあ、お前なら、生理はまだなんだろう？」

「生理あるもん……」
「え……ホントか？」
「……とーまは、私とケツコンしてくれるの？」

「へ？ な、なんていきなり、そうなるんだ！？」
「な、なぜって！？むう～ 私の初めてを奪ったくせに……
それに赤ちゃんだってできちゃうかもしれないっていうのに……
とーまには、私に対して責任というものが生じたんだよ！！」

「ははっ……そんなことは、わかってるさ。」
できるかぎり爽やかにインデックスに笑いかける。
「あは、とーま……それなら……」

「だがな……まだ赤ちゃんができちゃったとは限らないし……
それに、おれにはまた自分に加え二人人間を養える能力もない！！」

「むう～、最低だよ……とーま」
「悪い！！だが、その時が来たら出来る限りのことはっ！！」

「絶対だよ……ともかく……
とーまは私に一生
ご飯をおごり続けなきゃダメなんだよ！！」

果たして、好奇心の代償は当麻に
とって高くついたのか、
結局今までと変わらないのか……
インデックスの子宮が潰になって
答えを出すまでわからなかった。

「んっ……これでいかが……でございますか？」

「うはっ！！ こ、これは……気持ちいい！！」

温かくボリュームのあるふたつの乳房に、ペニスがすっぽりと包み込まれる。
先端だけはどうにか拘束から逃れ、なんとか顔を出すことを許されている。

妊娠しているだけあって、胸は柔らかいというよりはやや張りがあり、しっかりとした輪郭を感じとれる。

「ほら、インデックスさん……お口を近づけてくださいませ」

「ん……えーっと、こ、どうかな？」

インデックスは舌の先端で亀頭の先っぽをつつつく。

「くあっ！！」

「そうです、とってもお上手でございますよ」

敏感な亀頭への舌の刺激に思わず身体が硬直してしまう。

「うくっ……」

「んあ……逃げられないんだよ。今日は私たちが、
と一まをいじめてあげるんだからね！！」

「ふふ……覚悟してくださいませ」



「では、わたくしも……気持ちよくしてさしあげます……んっ」
オルソラがその豊満な胸をゆっさゆっさと上下にゆすり始めた。

「ぐうっ!!!」

張りのある2つの乳房は左右から竿を押しつぶすかのように、
ぎゅつと締め付けながら上下にペニスをしごく。

「まあまあ……若干、胸とオチンチンの間に抵抗があるようです。
このままでは、どちらも摩擦で痛くなってしまいますね。
滑りを良くいたしましょうか……」

そう言うと、オルソラは口から涎を垂らし、
胸の谷間に潤滑油替わりに摺り込んでゆく。

「……わ、私だって!! 手伝うんだよ。ん〜」

オルソラに追従するように、
インデックスは亀頭の先っぽを舐めながら、
ヨダレを垂らし胸の谷間へすり込んでいった。

「うあっ……!!!
さらに胸が密着状態になって……ぐうっ!!!」

二人のよだれは胸の谷間でミックスされ、
ペニスをコーティングしていくのだった。



「再開致しますね……んっ、ふっ」

「私も……べろっ……ンっちゅっ」

「うあっ!! くっ……!!!」

再びゆっさゆっさと豊満な胸が上下に揺り動かされる。

「んっ……とーまの、先っほがびくびくって震えてるんだよ……
ふあっ!! 出してきた!!!」

苦味のある先走りの汁がインデックスの舌に触れる。

「あっ……ああ……わたくし……
もう、我慢できません。おっぱいが……
で、出てしまいますっ!!!」

オルソラの乳首からぼたぼたと母乳が濡れ始める。

「ふあっ……お、おっぱいがでた!? びっくりなんだよ……」

「ふう……ンっ!!!」

次第に母乳は勢いを増し、
びゅっびゅっという噴射に変化していった。

「ああ……
止まらなくなってしまいました……」

「ほわ～すごい……
私も早くこんなふうにならないかな」……
そしたら、自分のおっぱい飲めば
お腹すかなくて済むもんね」

インデックスは愛撫をするのも忘れ、
母乳の噴射に見入っていた。



「つく……も、もうだめだ……で、出るぞっ!!」

「えっ? ふあっ!!!」

左右からきつくはさまれ、
せばめられた尿道から飛び出た精液は
いつも以上の勢いをもって二人の顔に盛大に飛び散った。

「やんっ!! まったく、とーまは……
いつも出し過ぎなんだよ!!
あ〜あ……髪の毛にかかったら、洗うの大変なんだがらね!!!」

インデックスが言っている間にも、さらにペニスから飛び散る精液が
インデックスの髪の毛に降りかかった。

「まあまあ……
それよりも……とつても……
おいしいのでございますよ。
ああ……これほどまでに濃厚で淫靡な味は……んくっ」

精液をこくりと、飲み込むたびに体を震わせる。

「あはあん……
これがわたくし達の中で赤ちゃんになったと思うと、
その感慨もひとしおなのでございますよ……」

「オルソラにとっては……
そ、そんなものなのか……」

「ええ、そうなのですよ」

一方のインデックスはというと、
しかめっ面をして、精液を見つめている。

「んむむう……私はもっと、甘いなら甘い!
とか、はっきりした味が好みなんだよ!!
んべっ!! 口に入っちゃったよ……」

「はは、インデックスは妊娠したって結局は
お子ちゃまなんだよな!!!」

「もう……とーまは黙ってるんだよ!
私だって、飲めないことはないんだから……んっ!!!」

負けず嫌いなところのあるインデックスは、
顔に付着した精液を何とか舐めとってゆくのだった。

「あぁっ……も、もっと吸ってください……」
な、なんと気持ちが良いのでございましょう……」

インデックスがオルソラの右胸の乳首に吸い付き、母乳をごくごく飲み続ける。
オルソラ自身は残った左の乳首を自ら揉んで、母乳を吹き出し続けていた。

「あ、赤ちゃんが産道を通り抜けてきているというのに……
気持ちが悪くなって……いるのでございます……うん！」

出産には大変な痛みを伴うものだというのが常識ではあるが、
オルソラに限って言えば痛みどころか快感を感じているらしい。

「っ!! はうっ……んっ!! ヨクン……
と、とうまあ…… ンツ んぶっ…… ヨクッ」

体の小さいインデックスは、
さすがに産道を通り抜ける赤ちゃんで
快感を得る事はできないようだ。

身体への負担が軽くなるだろうからと選んだ、
お湯に浸かりながらの出産とはいえ、
大変なことにはかわりがない。

「んくっ……はあ……」

必死に食欲を満たすことによって、必死に痛みを耐えている。

「大丈夫か? ほら、これで少しは、赤ちゃんも出やすくなるんじゃないか？」

膣の横に手を添えて左右に広げてやる。これで、自分で広げるより楽になるといいのだが。

「んくっ!! はうっ!! ンっ!! んん~!!!!」

その甲斐があつてか、ほどなく、めいっばいに開かれた膣口から
赤ちゃんの頭が触れられるほどに姿を表し始めた。

「あはあ……はあ～ん
ああ……いけません……赤ちゃんにイカされてしまうなど……
ああ……でも……はあ、あぁっ!! 気持ちよすぎて……」

オルソラの方は自分が手伝わなくてもいいほど、
順調に赤ちゃんの頭部が見え始めていた。

「あぁっ……も、もっと吸ってください……」
な、なんと気持ちが良いのでございましょう……」

インデックスがオルソラの右胸の乳首に吸い付き、母乳をごくごく飲み続ける。
オルソラ自身は残った左の乳首を自ら揉んで、母乳を吹き出し続けていた。

「あ、赤ちゃんが産道を通り抜けてきているというのに……
気持ちが悪くなって……いるのでございます……うん！」

出産には大変な痛みを伴うものだというのが常識ではあるが、
オルソラに限って言えば痛みどころか快感を感じているらしい。

「っ！！ はうっ……んっ！！ ヨクン……
と、どうまあ…… ンツ んぶっ…… ヨクッ」

体の小さいインデックスは、
さすがに産道を通り抜ける赤ちゃんで
快感を得る事はできないようだ。

身体への負担が軽くなるだろうからと選んだ、
お湯に浸かりながらの出産とはいえ、
大変なことにはかわりがない。

「んくっ……はあ……」

必死に食欲を満たすことによって、必死に痛みを耐えている。

「大丈夫か？ ほら、これで少しは、赤ちゃんも出やすくなるんじゃないか？」

膣の横に手を添えて左右に広げてやる。これで、自分で広げるより楽になるといいのだが。

「んくっ！！ はうっ！！ ンっ！！んん～！！！！」

その甲斐があつてか、ほどなく、めいっばいに開かれた膣口から
赤ちゃんの頭が触れられるほどに姿を表し始めた。

「あはあ……はあ～ん
ああ……いけません……赤ちゃんにイカされてしまうなど……
ああ……でも……はあ、あぁっ！！ 気持ちよすぎて……」

オルソラの方は自分が手伝わなくてもいいほど、
順調に赤ちゃんの頭部が見え始めていた。

「あひっ!? な、なんということだ……ごさいましよう!?
あ、赤ちゃんに……ああっ!! ンんっ イッ……っ!! ンっ あはあんっ!!!」

赤ちゃんの頭がすっほり出ると同時にオルソラは達した。

ビクビクッとオルソラの体が硬直し、びくんと跳ね上がる。

「はあっ……ああんっ!! 身体が勝手に動いてしまいますっ!!!」

がくがくッと腰が前後に揺れた。
動かすことで、さらに赤ちゃんは押し出され、特に手伝うことなく、
赤ちゃんの身体はすぽと水中へと飛び出てしまった。

「ああ……わたくしの赤ちゃん……」

オルソラはすかさず赤ちゃんをその手の中へと導いた。

一方のインデックスは……

「ふわわ……とうまあ ふおうまあ……!! っ!!!
順調に顔まで出すところまできていた。

いままでは、ほぼ手伝うことなくじっとみているだけだったが、
ここからは自分も手伝うことができる。

「よしっ!! 一気に引っ張り出すぞ!!!
「ンんっ!!!」

頭部を出た赤ちゃんを慎重に引っ張り出す。
ずるっと、いままで頭部を出すまで時間がかかっていたのが嘘みたいに、
あっという間に残りの胴体はすぽと出るのだった。

「よくがんばったな! インデックス! ほら、見てみるよ!!」
「ふえ……うん」

インデックスは振り向いて我が子と対面する。

「んっ……あはっ……赤ちゃんだよ。かわいいね」
「ああ、そうだな、とつてもかわいい……お前の赤ちゃんだぞ!!!」

ほどなく、まだへその緒でつながったままの赤ちゃん三人は大きな声で産声を上げ始めた

「あひっ!? な、なんということとで……ごさいましよう!?
あ、赤ちゃんに……ああっ!! ンんっ イッ……っ!! ンんっ あはあんっ!!!」

赤ちゃんの頭がすっほり出ると同時にオルソラは達した。

ビクビクッとオルソラの体が硬直し、びくんと跳ね上がる。

「はあっ……ああんっ!! 身体が勝手に動いてしまいますっ!!!」

がくがくッと腰が前後に揺れた。
動かすことで、さらに赤ちゃんは押し出され、特に手伝うことなく、
赤ちゃんの身体はすぽと水中へと飛び出てしまった。

「ああ……わたくしの赤ちゃん……」

オルソラはすかさず赤ちゃんをその手の中へと導いた。

一方のインデックスは……

「ふわわ……とうまあ ふおうまあ……!! っ!!!
順調に顔まで出すところまできていた。

いままでは、ほぼ手伝うことなくじっとみているだけだったが、
ここからは自分も手伝うことができる。

「よしっ!! 一気に引っ張り出すぞ!!!
「ンんっ!!!」

頭部を出た赤ちゃんを慎重に引っ張り出す。
ずるっと、いままで頭部を出すまで時間がかかっていたのが嘘みたいに、
あっという間に残りの胴体はすぽと出るのだった。

「よくがんばったな! インデックス! ほら、見てみるよ!!」
「ふえ……うん」

インデックスは振り向いて我が子と対面する。

「んっ……あはっ……赤ちゃんだよ。かわいいね」
「ああ、そうだな、とつてもかわいい……お前の赤ちゃんだぞ!!!」

ほどなく、まだへその緒でつながったままの赤ちゃん三人は大きな声で産声を上げ始めた

「ねえねえ見てみて!とうま、とうまー!!
ちゃんとおっぱい吸ってるよ!!!」

「おお、本当だ……へえ、すごいなあ!あ……そうだ、インデックス……
ちゃんと飲ませた後はげっぶをたさせるんだぞ。忘れるなよ?」

「ふえ?」
「でないと、せっかく飲んだおっぱい吐き出しちゃうからな!!!」

「わ、わかってるんだよ!
せっかく飲んだのに、吐き出しちゃったら、
もったいないもん!!!」

「そ、そういう問題か?……ま、いっか」

インデックスの方はもう良いだろうとおもい、
ふっとオルソラの方に向く。

「あら?あなた様もおっぱいが欲しいのでございますか?
でも、今は赤ちゃんの時間ですからもう少し待っていてくださいませ。
赤ちゃんがお願いっばいになったとしても、
飲みきれなくらい出るのでございますよ。安心しましたか?」

「あ、ああ……
いや、俺は……別にいいんだけどな……」

「ふふ、そう遠慮しないでもいいのですよ?どうせ、
余った母乳はきちんと出し終えるまで出さないとならないのですから……
詰まって出が悪くなってしまうので……」

「そ、そうかあ? なら、あとでもらおうかな……」

赤ちゃんを抱いた三人の表情は、出産前とはまるで違って見えた。
少女でも、女でもない、母親の顔がそこにはあった。
そのことに若干の戸惑いを覚え、まともな目を合わせられない当麻であった。

「はあっ……どうだ……どうだっ!? 神裂っ!!!」

「んあっ!! んお”お”……奥にっ!!!と、届いてますうっ!!!」

奥まで挿し込まれたペニスが子宮をこつこつとノックする。
子宮口の固い感触がペニスの先端に伝わる。

「おっ!! これが子宮口だろ……?
ほんとに届いてるんだな……! ほらっ……どうだっ!?!」

「ゾ”あ”っ!! はああんっ!!!」

子宮口にペニスの先端が届くたびに、下半身には鈍痛が生じる、
それだけなのに、まるで全身を大きな串で貫かれてしまったかのように、
神裂火織の動きを封じ込めていた。

「もっと抵抗されるもんだと思ってたけど……
神裂は子宮が強いんだな!!!」

ぐっぐつと、ペニスの先端が子宮の口を押し込むたびに、
神裂の全身に熱がこみ上げ、快樂の悦びにうち震える。

「はあ”っ!! おおおんっ!! なあっ!!
おっばいだめ”え”……!!!」

豊満な胸の固く尖った先端部分をきゅっつつまめば、
つまんだ指の圧力に合わせるかのように腫が
きゅっときゅっくペニスを締め付け返す。

「おおっ!? くっ…… はあっ……はっ ふうっ!!!」

「ん”ああんっ!!!」

うなじにあつい吐息を吹きかければ、
その吐息は瞬く間に身体を駆け抜け、全身を震わせた。

「はあっ、はっ……すごいっ……子宮を攻めながらだと……
こんなに反応がいいなんて……!」

「はあっ……どうだ……どうだっ!? 神裂っ!!!」

「んあっ!! んお”お”……奥にっ!!!と、届いてますうっ!!!」

奥まで挿し込まれたペニスが子宮をこつこつとノックする。
子宮口の固い感触がペニスの先端に伝わる。

「おっ!! これが子宮口だろ……?
ほんとに届いてるんだな……! ほらっ……どうだっ!?!」

「ゾ”あ”っ!! はああんっ!!!」

子宮口にペニスの先端が届くたびに、下半身には鈍痛が生じる、
それだけなのに、まるで全身を大きな串で貫かれてしまったかのように、
神裂火織の動きを封じ込めていた。

「もっと抵抗されるもんだと思ってたけど……
神裂は子宮が強いんだな!!!」

ぐっぐつと、ペニスの先端が子宮の口を押し込むたびに、
神裂の全身に熱がこみ上げ、快樂の悦びにうち震える。

「はあ”っ!! おおおんっ!! なあっ!!
おっばいだめ”え”……!!!」

豊満な胸の固く尖った先端部分をきゅっつまめば、
つまんだ指の圧力に合わせるかのように腫が
きゅっときゅっくペニスを締め付け返す。

「おおっ!? くっ…… はあっ……はっ ふうっ!!!」

「ん”ああんっ!!!」

うなじにあつい吐息を吹きかければ、
その吐息は瞬く間に身体を駆け抜け、全身を震わせた。

「はあっ、はっ……すごいっ……子宮を攻めながらだと……
こんなに反応がいいなんて……!」



「はああっ!! イッ!! イぐ……うっ!! イぐうっ!!」

がくがくっと全身が震えるが、もはや自身の意思で制御できるものではなくなっていた。

「なあ……俺の、赤ちゃんっ……はっ!! 産んでくれるかっ!?!」

急に飛び出す赤ちゃんという単語。
それがどのような意味を持つのが、
冷静な判断をするのはもはや神裂の思考では不可能だった。

「はイッ!! う、産みますっ ……ふう”う”ンっ!!
だからっ!! はやくうっ……イがせてえ!!」

「よしっ!! お前の身体に……俺の赤ちゃんっ!!
孕めっ!! 孕めよおっ!! ぐっ……イクぞおっ……ああっ!!」

奥にしっかりとペニスを導き、子宮口にぴったりと
鈴口を合わせ、精液を発射する。

「ふああっ!! イ”グっ!! ンイ……くううっ!!」

子宮口の数ミリの隙間を縫って、射精の勢いを借りた
精液が子宮の中へと侵入していった。

「は”お”っ!! ほおおんっ!! ……なあっ!! はあ”っ!!
こ、これが赤ちゃんを作る射精……なんてふねえ……!!
ンっなあ……へえあっ!!」

ペニスの射精をする際の収縮する脈動、
膣の中に勢い良く広がってゆく精液のどろりとした感触を
膣壁で敏感に感じ取っていた。

「はうっ!! 精液……んああっ!! 私の中に……広がるうっ!!」



「はああっ!! イッ!! イぐ……うっ!! イぐうっ!!」

がくがくっと全身が震えるが、もはや自身の意思で制御できるものではなくなっていた。

「なあ……俺の、赤ちゃんっ……はっ!! 産んでくれるかっ!?!」

急に飛び出す赤ちゃんという単語。
それがどのような意味を持つのが、
冷静な判断をするのはもはや神裂の思考では不可能だった。

「はイッ!! う、産みますっ ……ふう”う”ンっ!!
だからっ!! はやくうっ……イがせてえ!!」

「よしっ!! お前の身体に……俺の赤ちゃんっ!!
孕めっ!! 孕めよおっ!! ぐっ……イクぞおっ……ああっ!!」

奥にしっかりとペニスを導き、子宮口にぴったりと
鈴口を合わせ、精液を発射する。

「ふああっ!! イ”グっ!! ンイ……くううっ!!」

子宮口の数ミリの隙間を縫って、射精の勢いを借りた
精液が子宮の中へと侵入していった。

「は”お”っ!! ほおおんっ!! ……なあっ!! はあ”っ!!
こ、これが赤ちゃんを作る射精……なんてふねえ……!!
ンっなあ……へえあっ!!」

ペニスの射精をする際の収縮する脈動、
膣の中に勢い良く広がってゆく精液のどろりとした感触を
膣壁で敏感に感じ取っていた。

「はうっ!! 精液……んああっ!! 私の中に……広がるうっ!!」

「はあっ……はあ……」

射精が終わった後も、名残り惜しむかのようにペニスを膣に入れたまま、ゆっくり動かし続ける。ペニスはすでに硬さを失い結合部分からは精液がとろりと流れ出す。

「っ！！ はあんっ……ああ……でちゃ……ためえ」

股の間に垂れを伝わる精液を敏感になっていた身体が感じ取る。

やがてしばらくするうちに神裂の頭の霧が晴れ、冷静な思考が舞い戻る。

「ああ……私はあなたの赤ちゃんを産むのですわ……」

「ああ、そうだ。」

快樂で思考能力が低下して、とんでもないことを口にしてしまったものだと思う。が、冷静になった今になっても、拒絶しようという気にはならなかった。

「もし……今これで妊娠しなくなったら、ちゃんと妊娠しているのが分かるまで……毎日だっ、中出ししてやるからな！！」

「は、はい……よろしくお願ひします……」

「で……とりあえずは……」

「と、とりあえずは？」

「これからもう一回射精する！！」

「はい……！！」

膣の中でゆっくり動いていたペニスはすっかり硬さを取り戻していた。神裂も、膣の中でペニスの存在感が再び増してきていたことを感じ取っていた。

「おまえはっ……！！ 今日これから、俺の女だっ！！」

そう言われ、神裂火織は確信する。

「ああ……そうです……私は、あなたのものですっ！！ あなたのものに……なりますっ！！」

女としての大切な部分を掌握されたという事実。それを悦びと感している事実。すべてを受け入れ、神裂火織は上条当麻の女になった。

「はあっ……はあ……」

射精が終わった後も、名残り惜しむかのようにペニスを膣に入れたまま、ゆっくり動かし続ける。
ペニスはすでに硬さを失い結合部分からは精液がとろりと溢れ出す。

「っ！！ はあんっ……ああ……でちゃ……だめえ」

股の間に垂れを伝わる精液を敏感になっていた身体が感じ取る。

やがてしばらくするうちに神裂の頭の霧が晴れ、冷静な思考が舞い戻る。

「ああ……私はあなたの赤ちゃんを産むのですわ……」

「ああ、そうだ。」

快樂で思考能力が低下して、
とんでもないことを口にしてしまったものだと思う。
が、冷静になった今になっても、
拒絶しようという気にはならなかった。

「もし……今これで妊娠しなくたって、
ちゃんと妊娠しているのが分かるまで……
毎日だって、中出ししてやるからな！！」

「は、はい……よろしくお願ひします……」

「で……とりあえずは……」

「と、とりあえずは？」

「これからもう一回射精する！！」

「はい……！！」

膣の中でゆっくり動いていたペニスはすっかり硬さを取り戻していた。
神裂も、膣の中でペニスの存在感が再び増してきていたことを感じ取っていた。

「おまえはっ……！！ 今日これから、俺の女だっ！！」

そう言われ、神裂火織は確信する。

「ああ……そうです……私は、あなたのものですっ！！ あなたのものに……なりますっ！！」

女としての大切な部分を掌握されたという事実。
それを悦びと感している事実。
すべてを受け入れ、神裂火織は上条当麻の女になった。

「あはっ！！このおっぱいなら……もうそろそろ出るんだよ！」

妊娠してボリュームの増した胸をさすり、硬くなった乳首をぎゅっと摘んで確信を持ってつぶやいた。

「んあっ！！ や、やめてください……インデックス！！」

体をよじらして抵抗の意思を示すが、その動きは弱々しい。

「だめだよ！ちゃーんと出しておかないと……肝心なときに出にくくなっちゃうんだよ！ほらほら……」

「ん、確かに……感じるぞ……んむっ……ミルクの匂いが乳首から漂ってきてる……」

「ひやうっ！？ あ、あなたまで……」

乳首を甘噛みされ、神裂のからだからふにやっど力が抜けはじめる。

「スンスン……すごい匂いなんだよ……私のとこまで漂ってきてるもん……」

豊かに実った2つの果実の先端からは、ほのかに甘ったるいミルクの香りが漂っていた。

「はぐう……そ、そんなに強く揉まないで……くださあ……へあッ……」

インデックスが搾り出すように乳首をぎゅうっと指でつまむ。

「あはっ！！早く飲みたいなあ……ねえねえ、まだなの？私、お腹空いてきちゃったよ。」

「まだかあ？ほらっ……早く出せよっ！！！」
「ひやっ！？ あうんっ！！！」

2つの乳房を同時に受撫を受ける。じくじくと、熱い感覚が胸全体に広がり始める。さらに、下からペニスが身体を突き上げ、膣の奥深くに突き刺さる。

「へあっ！？ らめえ……身体に力が……ひうっ！！ イッ……イクっ！？」

びくびくっと、膣の中が収縮し、身体がぎゅっと硬直した。かまわず当麻は腰を振り、膣の中をペニスでかき回し続ける。

「んあ！ やっ！！そ、そんなに突き上げないでくださっ……！！ ふあああっ！！！」
「ふおら……だせよっ……ン～～！！！」

乳首に歯を立て、顔を後ろに引いて引っ張り出す。

「んああああっ！！そ、そんなにひっぱっては……ああああんっ！！！」

胸の刺激で、早くも今日一回目の絶頂を迎えた。

「んあっ……あへあ!？」

段々と真っ白に霞んでいた頭の中が晴れてくる。

「おっ……これは……んくっ……」

「あはあ……いっぱい出てるんだよ!!!」

自身の腹が膨らんだことに次ぐ大きな変化が、
神裂火織の身体には生じていた。

「や、やああ で、出てるっ!!! ンああんっ!!!
す、吸わな……ンい でえ……!!!」

インデックスは吹き出した母乳を手ですくいとって、
べろりと平らげていく。

「ん～……!!! ちょっとまだ薄いかもだけど……
とってもおいしいよ!!!」

「ちゃんと、ミルクの味がするぞ!!!
これで、いつでも赤ちゃんにおっぱいあげられる体になったな!!!」

当麻は乳首に口をあて、ゴクゴクと噴き出る母乳を飲み干していく。

「ああ……母親になっていくう……私の体……
あはあ…… っ!!! んあっ……ふああんっ!!!」

「ひぐっ……これ以上揉まないで……くださっ!!
あっ!? ためっ……ためえっん!!

びくんびくん!!と、身体が跳ね上がる。

「あはっ!! おっぱい揉まれて気持ちよくなってる!!
……ほ～ら、もっとしてあげるんだよ!!

「くうっ!! ますます……締まる!!」

膣がこれまで以上にびくびくっと
収縮を繰り返し、
中のペニスをぎゅっとしめつけた。

「はっ……はっ! 神裂……ほらっ!
ちんこ気持ちいいか? どうだっ!?!」

「いぐっ!! んっ!! くううっ!!」

とっくに絶頂を迎え、
まともな返事を返すことが出来なくとも、
悦びに身を包む身体が、
ぶるぶるっと全身でその答えを返していた。

「おっ……おお! 俺もっ!! イクぞっ!!」

神裂の膣の動きに促されるように当麻が射精をする。

「はうっ!! やっ!! 赤ちゃんに届くう……!!」

「母乳を飲ませてくれたお返しだ!!
ちゃんと受け取れ!!」

「ひいやっ!! ……もうこれ以上……らめ……めえっ!!」

精液が膣の中を満たした。
子宮口は精液の刺激を受け、本人の意志とは関係なく収縮する。

「はうっ……お、お腹……動くう……赤ちゃんびっくりして……」

敏感な性感帯と化した全身が、
その異変さえも、快楽として受け取り悦びに震える。

「ひぐ……!? くううっ!!」
再び絶頂の波が神裂の体を駆け上った。

「あはっ!!
まだまだ出てくるよっ!! 飲みきれるかなあ……」

ぼたぼたと乳首の先からこぼれ落ちた母乳は、
神裂火織の身体を白く染めてゆく。

「ひいんっ!! いやっ……らめえ!!」
歓喜の悲鳴はこのあともさらに続くのだった。



「よーし……いいぞ！ はっきりと頭が見えるようになってきた！」

赤ちゃんの頭が外に出てくるほどに、おしりの割れ目がなくなってしまうくらいに肛門が押し出され、せり上がってきている。

産道がどれだけ赤ちゃんの頭で押し広げられているのかが、わかろうというものだ。

「んっ！！ 本当ですか？ くうう～！！ はうっ…… んっ！
ちや、ちやんと取り上げて下さいっ……ねっ！！はうっ！！」

赤ちゃんの頭が産道をこするときに生じる痛みにも必死に耐えているようだ。

「ああ……まかせとけ！ いつでも準備はOKだ！」

しっかりと赤ちゃんの頭の横に手を添えて、出てくるのを待つ。
ゆっくり……確実に赤ちゃんの頭は外へとせり出し、頭が見えるようになっていた。

「んぐっ！！ ふんん～！！はぎっ…… ンイっ！！」

今までにないくらいに膣口がはっきりと広がり、
赤ちゃんの頭部は外へと、外へと押し出されてきている。

「んっ！！ ふあっ！！」

びくんっ！と身体が震え、水面を揺らす。

「大丈夫か？神裂！！苦しいのか？」

「はっ！？ お、お湯のおかげでしょうか……思っていたほどの痛みではありません……
そ、それよりも……今の状況は、どうなっているのですか？」

「あ、ああ…… そっか、そっちからじゃ見えないもんな……」

ついつい見入って、現状報告を忘れてしまった。

安心しろ、もう少しで頭が全部出てくるぞ！！あと、ほんのちょっとだ、がんばれよ！！

「そうですか……ん くっ！！ ううんんっー！！あと……ちょっと……んん～！！」

やがて、赤ちゃんの頭部は完全に水中に姿を表すのだった。



「よーし……いいぞ！ はつきりと頭が見えるようになってきた！」

赤ちゃんの頭が外に出てくるほどに、おしりの割れ目がなくなってしまうくらいに肛門が押し出され、せり上がってきている。

産道がどれだけ赤ちゃんの頭で押し広げられているのかが、わかろうというものだ。

「んっ！！ 本当ですか？ くうう～！！ はうっ…… んっ！
ちや、ちやんと取り上げてくださーいっ……ねっ！！はうっ！！」

赤ちゃんの頭が産道をこするときに生じる痛み在必死に耐えているようだ。

「ああ……まかせとけ！ いつでも準備はOKだ！」

しっかりと赤ちゃんの頭の横に手を添えて、出てくるのを待つ。
ゆっくり……確実に赤ちゃんの頭は外へとせり出し、頭が見えるようになっていた。

「んぐっ！！ ふんん～！！はぎっ…… ンイっ！！」

今までにないくらいに膣口がはっきりと広がり、
赤ちゃんの頭部は外へと、外へと押し出されてきている。

「んっ！！ ふあっ！！」

びくんっ！と身体が震え、水面を揺らす。

「大丈夫か？神裂！！苦しいのか？」

「はっ！？ お、お湯のおかげでしょうか……思っていたほどの痛みではありません……
そ、それよりも……今の状況は、どうなっているのですか？」

「あ、ああ…… そっか、そっちからじゃ見えないもんな……」

ついつい見入って、現状報告を忘れてしまった。

安心しろ、もう少しで頭が全部出てくるぞ！！あと、ほんのちょっとだ、がんばれよ！！

「そうですか……ん くっ！！ ううんんっー！！あと……ちょっと……んん～！！」

やがて、赤ちゃんの頭部は完全に水中に姿を表すのだった。

「よし、頭は全部出た！身体をこれから引っ張り出すからな！！」

「はあ……はい……あなたにお任せします……んっ！！」

まず、頭の側面を持ち、片方に曲げるように引っ張る。
一方の肩が出たところで、今度は逆に身体を傾けてもう一方の肩をせり出す。
思いの外作業はスムーズに進んだ。

「んぐうっ！！ おおっ！！ ほオオンツ！！！！」

まるで獣みたいな声を上げて神裂火織は吠えた。
びくびくっとなんげと体が震え尻がぐんっとなんげと跳ね上がる。

「お、おいっ！！ た、大丈夫か！？」

「は、はい……大丈夫です。実は……気持よすぎて……軽くイツてしまいました……」

「な、なんだって……じゃあ今まで苦しそうに見えたのは……」

「痛いのではなく……気持よくて、イキそうになるので……、それに耐えてました……」

お湯に浸かって火照っていた顔がさらに真っ赤に染まる。

「ははっ……なんだ……」

思わず体の力が抜けそうになる。

「おっと、いまはそんなことより……」

へその緒が引っかかかっていないか確かめながら
残りの身体を慎重に引っ張り出す。
幸いにも特に問題はなく、
最後まで身体を引きぬくことができた。

「っ！！ はうっ…… ううんっ！！！！」

再び尻がびくんと跳ね上がる。

「なんだ？また……か？」

「は、はい……」

神裂火織は水面に浸かるくらいに
顔を伏せた。



「よし、頭は全部出た！身体をこれから引っ張り出すからな！！」

「はあ……はい……あなたにお任せします……んっ！！」

まず、頭の側面を持ち、片方に曲げるように引っ張る。
一方の肩が出たところで、今度は逆に身体を傾けてもう一方の肩をせり出す。
思いの外作業はスムーズに進んだ。

「んぐうっ！！ おおっ！！ ほオオンツ！！！！」

まるで獣みたいな声を上げて神裂火織は吠えた。
びくびくっとな体が震え尻がぐんっとなね上がる。

「お、おいっ！！ た、大丈夫か！？」

「は、はい……大丈夫です。実は……気持よすぎて……軽くイツてしまいました……」

「な、なんだって……じゃあ今まで苦しそうに見えたのは……」

「痛いのではなく……気持よくて、イキそうになるので……、それに耐えてました……」

お湯に浸かって火照っていた顔がさらに真っ赤に染まる。

「ははっ……なんだ……」

思わず体の力が抜けそうになる。

「おっと、いまはそんなことより……」

へその緒が引っかかかっていないか確かめながら
残りの身体を慎重に引っ張り出す。
幸いにも特に問題はなく、
最後まで身体を引きぬくことができた。

「っ！！ はうっ…… ううんっ！！！！」

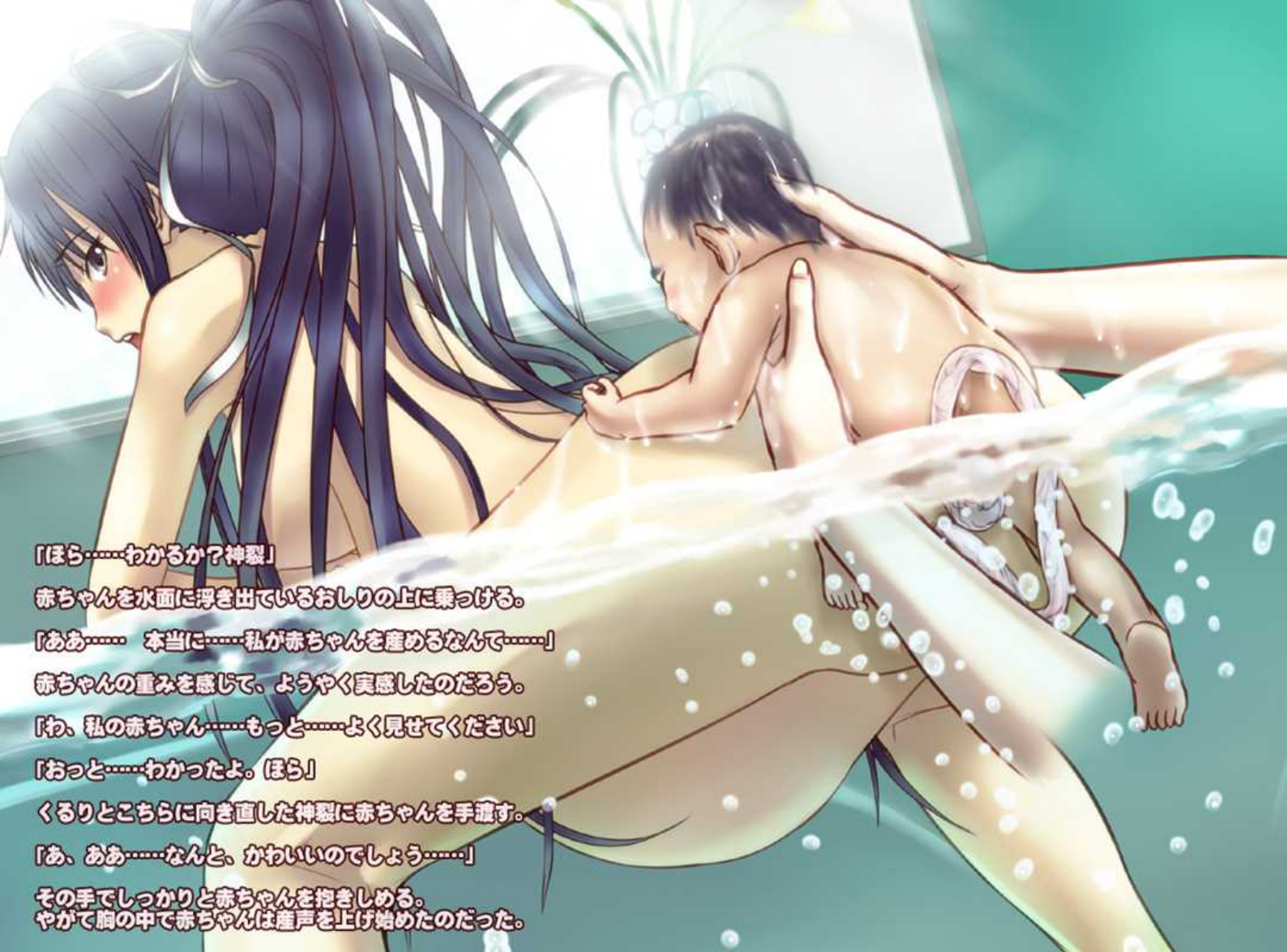
再び尻がびくんっとなね上がる。

「なんだ？また……か？」

「は、はい……」

神裂火織は水面に浸かるくらいに
顔を伏せた。





「ほら……わかるか？神裂」

赤ちゃんを水面に突き出ているおしりの上に乗っける。

「ああ…… 本当に……私が赤ちゃんを産めるなんて……」

赤ちゃんの重みを感じて、ようやく実感したのだろう。

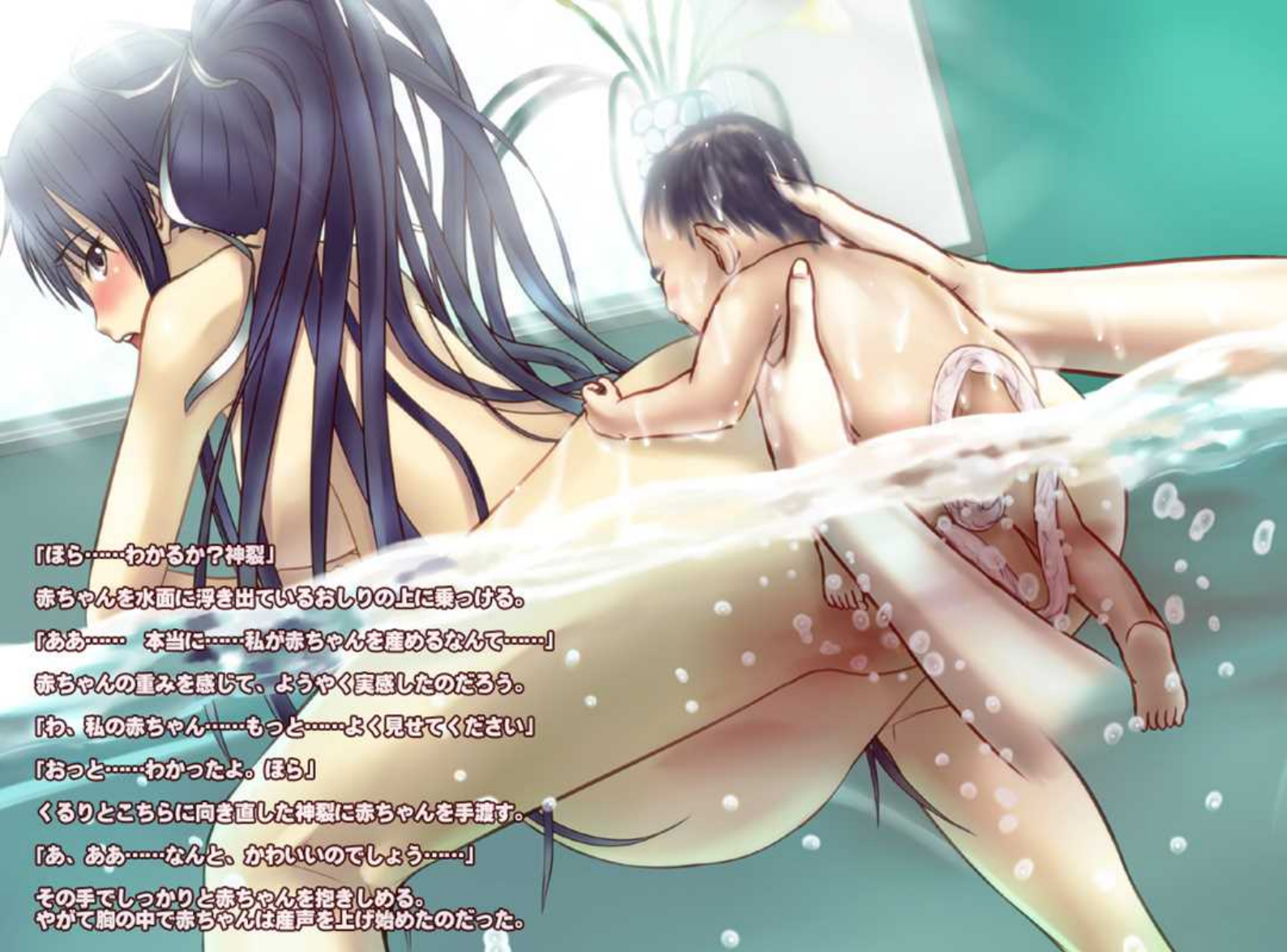
「わ、私の赤ちゃん……もっと……よく見せてください」

「おっと……わかったよ。ほら」

くるとこちらに向き直した神裂に赤ちゃんを手渡す。

「あ、ああ……なんと、かわいいのでしょう……」

その手でしっかりと赤ちゃんを抱きしめる。
やがて胸の中で赤ちゃんは産声を上げ始めたのだった。



「ほら……わかるか？神裂」

赤ちゃんを水面に突き出ているおしりの上に乗っける。

「ああ…… 本当に……私が赤ちゃんを産めるなんて……」

赤ちゃんの重みを感じて、ようやく実感したのだろう。

「わ、私の赤ちゃん……もっと……よく見せてください」

「おっと……わかったよ。ほら」

くるとこちらに向き直した神裂に赤ちゃんを手渡す。

「あ、ああ……なんと、かわいいのでしょう……」

その手でしっかりと赤ちゃんを抱きしめる。
やがて胸の中で赤ちゃんは産声を上げ始めたのだった。

「こ、これでいいですか？」

「ああ……いいぞ。」

堕天使メイドのコスプレをさせ、収まりきれない豊満な胸を露出させる。さしたる抵抗も見せず、従順と言えるくらいに素直に従う姿は少し物足りなくもあるが、本番はここからだ。

「ほ、本当にこのまま……私だけで出せと？」

「ああ、そうだ。見せてくれよ。だらしなく母乳を吹き出すさまを……俺に吸われなくても、もう勝手に出てくるようになったら？」

いつもは吸い出してたまった母乳を処理していたのだが、今回は趣向を変えて、神裂火織自らに母乳を出させる。

「くっ……で、手も使わずに……ですか？」

「余裕で出せるだろ？ 大きい胸を揺すればさ……」

屈辱的な言葉を投げつけられながらも、神裂火織の下半身は熱を帯び始める。その熱はやがて上半身にじわじわ広がる。

「わ、わかりました。いきます……ふんっ！！ くふっ！！」

身体を上下に揺らすと、ゆっさゆっさと胸が上下に跳ねる。

「いいぞ！！その調子だ！！
ほらほらっ…… もっと揺らしてっ！！」

「んっ！！ ふっ……！！」

乳房が引きちぎれてしまいそうな痛みに我慢しながら、ひたんびたんっ……と、音を鳴らしながら胸を揺らし続けた。自ら生じる音にも、羞恥を感じつつも興奮して、いつの間にか夢中で胸をゆすり続けていた。


「ふっ！！ んあっ！！」

「おおっっ！？」

なまめるい液体が胸の前に構えていた当麻の顔に振りかかる。

「んあっ！！ああ……で、出ますっ！！
んはああん……おっはい出るう！！」

神裂火織は、パンパンに張り詰めた乳房の先端にムズ痒さを感じ、母乳が出るという確信を得た。



「あっ! ああっ!! あはあっ!!で、でちゃいましたあ!!!」

「いいぞ!! すごい勢いだ!!!」

2つの乳首からは、激しい勢いで母乳が吹き出し始めた。
当麻の顔にびちゃびちゃと白い液体が振りかかる。

「んっ……ヨクっ……」

顔に付着し、口元に流れついたミルクを舌でなめとり飲み下す。

「わ、私の母乳の味は……い、いかがですか?」

「いいぞ、もっとほしいくらいだ」

「わ、わかりました……がんばりまっ……んんっ!!!」

リズムカルに上下に揺らし、乳房を腹に押し付け潰すようにするときに
乳首からびゅっつと母乳が吹き出す。

コツを掴んだ神裂火織は、懸命に体を揺らし、
胸の先端から母乳を撒き散らし続けた。

「ははっ……俺も見てるだけじゃ我慢できなくなってきた……
そろそろ俺も手伝ってやるぞ!!!」

「あッ!!!」

下半身に指を這わす。股間の下着には
膣内から生じた蛋が染みを作っていた。

「あはっ！ 美夢もでるようになったんだね。」

インデックスが美夢の胸を揉む。双丘の先端の突起から勢い良くミルクが吹き出し始めた。

「ん〜！！……美夢のと一っでも、おいしいよ！！」

インデックスは口に美夢の母乳が来るように
抜け目なく向きをコントロールしていた。

「ひゃっ、やんっ！！ 味を確かめないでよ……
そう言うインデックスだって……ほらほらあ！！」

「んあっ……あはっ！
く、くすぐったいよお！」

美夢がインデックスの胸を
きゅっつつまむ。
同じように乳首の先からは
母乳が勢い良く吹き出す。

「んふっ！ くすぐったいよお……やっぱり変な感じ！
「はあ……やっぱり赤ちゃんができると……誰でもおっぱいって、出ちゃうのねえ……」

臨月を迎えた腹を見比べ、感慨深げに美夢がつぶやいた。

「あ、当たり前だよっ！
おっぱい出なかったら赤ちゃんが可哀想なんだから……」

「それも、そうよね。」

「にしても……美夢は妊娠する前に比べて、こーんなにおっぱい大きくなって、
うらやましいんだよ……この、このお……」

「ちょっ……そんなに強く揉まないでよ！ ふあっ！！」

止むことなく美夢の乳首から母乳が吹き出し続ける。

「わ、私だってもうちょっと大きくなってはるはずだったのに……」

「わ、私の場合は、ほら……お母さんの血がやっど発揮されてきたってことかしら？」
「あー、そういえば美夢のお母さんおっぱい大きかったもんね……」

二人揃って、美夢の母親である美鈴の豊満な胸を思い出す。

「うー、うらやましいんだよ！！」
「はあ……お母さんには感謝だけでも……。あそこまで大きくなる気はしないわ……」

母乳を絞りながら、二人のガールズトークは止むことがなかった。



「おっ……すごい匂いだなあ。
ふたりともなにやってんだ？」

ミルクの甘ったるい香りがむわっと部屋中に広がっている。
直接二人を見るまでもなく二人の状況がどうなっているかが想像できるくらいだった。

「わっ！急に来ちゃダメなんだよ！！」

「そんな、つれないこと言うなよ。どれどれ……」

案の定、当麻が見てみれば、二人の胸は白い液体にまみれていた。

「お、二人でまたマッサージか？俺も混ぜてくれよ」

「まったくもう……」
「こんなのが父親だなんて」
「信じられないよ」「信じられないわ」

二人の声が重なる。

「な、なんだよ……」

「優柔不断で一人を選べないどころか、誰もかれも片っ端から手をつけるなんて……」

「最低なんだよ！！」

そう言いながらも、二人の顔に笑が浮かんでいたのは、
それが照れ隠し以外の何者でもなかったからだ。

「ひゃうんっ!! くすぐった……ンツ!!!」
「んっ……うまいぞ……インデックス!」

二人の間に身体を割り込ませ、かつて赤子の時に吸っていたであろう過去の経験に身を任せ、インデックスの乳首に吸い付く。

小さいながらも母乳のたっぷり詰まった乳房は張り詰めていて、間を置かず口の中にびゅっびゅと、暖かいミルクが広がっていくのがわかった。鼻腔を濃厚なミルクの匂いが通り抜ける。

「んくっ……こくん」

「わ、私の方も忘れるんじゃないわよ……」

夢中になって飲み下していると美夢の方からも搾乳の催促があった。

「ん……ああ、悪い悪い。じゃあ、美夢の方も……どれどれ!」

頭の向きを反対にするだけで、美夢の乳首の先端が口にうまいことずぼつとはまる。ずかさず先端に吸い付くと、あっというまに口の中に母乳が満たされる。

「ん〜。ごくっ……んぐっ!!!」

「ひゃあん……んんっ!! はんっ……ふあっ!!!」

びくびくと美夢の体が硬直する。が、ほどなくしてふにやっとな力が抜ける。なすがままに、胸から母乳を垂れ流し続ける。

「んっ……インデックスのも、美夢のも……うまいぞ。……あかちゃんも、これなら満足まちがいなしだな」

「えへへ……そんなのは当たり前なんだよ!! ほらほら、とーま、残りのおっぱいも!!」

「ああ……美夢も、残りのおっぱいの方も、ちゃんと飲んでやるからな! しっかり準備しておけよ!!!」
「はうん……わ、わかったから……また揉んじゃ駄目え……おっぱいでるから……ふうんっ!!!」

しっかり両方の胸から出る母乳を飲み干し、食欲を満たした当麻が、このあと性欲を満たすために二人と性交したのは言うまでもないことである。

「いくぞ……力を抜いておけよ……」

御坂美夢の膣を上条当麻のペニスが貫く。

「んあっ…… くんっ!! あっ……はあんっ!!!」

破瓜の痛みを感じるものの、それ以上に好きな男に抱かれているという喜びが御坂美夢から嬌声を溢れ出させていた。

「ああ……お姉さまの感じているお顔……
とっても素敵ですわ……」

白井黒子は息を荒げながら、美夢の顔をじっくり鑑賞しつつ、一心不乱に普段は絶対不可能な胸を揉むことに夢中になっている。

「や、やあん……黒子……そこ、だめえっ!!!」

普段なら実力行使で拒絶される黒子の愛撫も、口で拒否しつつも、されるがままになっていた。

「くう……お姉さまが……こんなあられもないお姿を……!!
これで、この類人猿が一緒でなければ……」

「くっ……はあ、はっ!!
そ、そんなひどい事言うなよ……」

普段決して見せることのない美夢の姿を見ることができるのは、いままさに美夢を買っている黒子の忌み嫌う類人猿こと上条当麻のおかげである。

「こんな類人猿のどこが……しかしこの男でなければお姉さまを、こんなあられもない姿にさせることができなかつたのも事実……!!
悔しいですが……いまは、相伴に預かりお姉さまを堪能しますっ!!!」

悔しさをにじませつつも、いまは嫉妬の感情よりも己の欲望を成就させんとする本能のほうが勝る。

「ひゃあんっ!! だ、だめえっ!! あ……そ、そこ弱い、んあっ!!!」

「くふっ……はあはあ……お姉さま、お姉さまあん!!!」

黒子の愛撫により、たちまち美夢の身体がくたっと脱力する。

「うおっ!! 急に奥に!?!」

ふっとペニスをきつく締め付けていた膣の収縮がゆるみ、ペニスが奥へと潜りこむ。奥に到達したペニスの先端が子宮口をノックする。

「んっ……痛う……でも、この感じ、不思議と嫌じゃない……はアッ」

鈍い痛を身体の奥から生じるが、それに不快感ではなく、喜びを感じるのだった。

「いくぞ……力を抜いておけよ……」

御坂美夢の膣を上条当麻のペニスが貫く。

「んあっ…… くんっ!! あっ……はあんっ!!!」

破瓜の痛みを感じるものの、それ以上に好きな男に抱かれているという喜びが御坂美夢から嬌声を溢れ出させていた。

「ああ……お姉さまの感じているお顔……
とっても素敵ですわ……」

白井黒子は息を荒げながら、美夢の顔をじっくり鑑賞しつつ、一心不乱に普段は絶対不可能な胸を揉むことに夢中になっている。

「や、やあん……黒子……そこ、だめえっ!!!」

普段なら実力行使で拒絶される黒子の愛撫も、口で拒否しつつも、されるがままになっていた。

「くう……お姉さまが……こんなあられもないお姿を……!!
これで、この類人猿が一緒でなければ……」

「くっ……はあ、はっ!!
そ、そんなひどい事言うなよ……」

普段決して見せることのない美夢の姿を見ることができるのは、いままさに美夢を買っている黒子の忌み嫌う類人猿こと上条当麻のおかげである。

「こんな類人猿のどこが……しかしこの男でなければお姉さまを、こんなあられもない姿にさせることができなかつたのも事実……!!
悔しいですが……いまは、相伴に預かりお姉さまを堪能しますっ!!!」

悔しさをにじませつつも、いまは嫉妬の感情よりも己の欲望を成就させんとする本能のほうが勝る。

「ひゃあんっ!! だ、だめえっ!! あ……そ、そこ弱い、んあっ!!!」

「くふっ……はあはあ……お姉さま、お姉さまあん!!!」

黒子の愛撫により、たちまち美夢の身体がくたっと脱力する。

「うおっ!! 急に奥に!?!」

ふっとペニスをきつく締め付けていた膣の収縮がゆるみ、ペニスが奥へと潜りこむ。奥に到達したペニスの先端が子宮口をノックする。

「んっ……痛い……でも、この感じ、不思議と嫌じゃない……はアッ」

鈍い痛を身体の奥から生じるが、それに不快感ではなく、喜びを感じるのだった。

「も、もう出そうだ……ビリビリ……
いや、お前はもう俺の女だっ!! いいよなっ!!美琴っ!! 中で……出すぞ!!!」

「あん……な、名前で……呼んでくれ、たあ……はうっ!!!」

膣の中でその存在感を示していたペニスが、さらに主張するかのようにプワッと膨らみ、美琴の思考を下半身に集中させた。

「よしっ!! 出るっ!!くうっ!!」
「ふえっ!? え……と、いいんだっ……け?も、う何も考えられ……」

なにか大切な事があったようなと思ったものの、次の瞬間には霧散してしまう。

「ひうっ!?!」

子宮口を射精の波が打ち寄せた。鈍い痛みではなく、まるでくすぐるかのような淡いこそばゆい感触が連続して子宮に襲いかかる。

「ふあっ……あっ、あっ、あっ!!!」

自分ではもうどうしようもないほどに、体がブルブル震えだす。この先に何かがあるのか、淡い思考は流れに身を任せることを選択した。。

「まあ……素敵です、お姉さま……イクのですね……」

膣の中だけにとどまらず、まるで体全身に射精が広がっているかのように、真っ白な温かいものが自分の体の隅々まで巡っていくように、美琴には感じられた。

「っ〜!!!」
言葉を発することさえできず、美琴は達していた。

「く……うはっ!!!」
膣が激しく収縮し、さらなる射精を促すかのようにきつくペニスを絞めつけた。

「ああ……これがお姉さまの達したときのお顔……ああ、素敵ですわ……」
黒子が、はあはあと息を荒らげながら、美琴の顔を愛でていた。

「つぶは! はあっ!!!」
「あらあら……お姉さま……女の喜びはこんなモノじゃあ、ありませんですの!!!」

「はぐん〜!!!」

長く絶頂していたせいで、呼吸を忘れていた美琴は必死に息を吸い込むが、黒子の愛撫ですぐにまた絶頂に達してしまう。

「まだまだですわっ!!!」

敏感な性感帯と化した身体は何度も何度も黒子によってイカされてしまうのだった。

「も、もう出そうだ……ビリビリ……」

いや、お前はもう俺の女だっ!! いいよなっ!! 美夢っ!! 中で……出すぞ!!!」

「あッ……な、名前で……呼んでくれ、たあ……はうっ!!!」

膣の中でその存在感を示していたペニスが、さらに主張するかのようにプワッと膨らみ、美夢の思考を下半身に集中させた。

「よしっ!! 出るっ!! くっ!!」
「ふえっ!? え……と、いいんだっ……け?も、う何も考えられ……」

なにか大切な事があったようなと思ったものの、次の瞬間には霧散してしまう。

「ひうっ!?!」

子宮口を射精の波が打ち寄せた。鈍い痛みではなく、まるでくすぐるかのような淡いこそばゆい感触が連続して子宮に襲いかかる。

「ふあっ……あっ、あっ、あっ!!!」

自分ではもうどうしようもないほどに、体がブルブル震えだす。この先に何かがあるのか、淡い思考は流れに身を任せることを選択した。。

「まあ……素敵です、お姉さま……イクのですね……」

膣の中だけにとどまらず、まるで体全身に射精が広がっているかのように、真っ白な温かいものが自分の体の隅々まで巡っていくように、美夢には感じられた。

「っ〜!!!」
言葉を発することさえできず、美夢は達していた。

「く……うはっ!!!」
膣が激しく収縮し、さらなる射精を促すかのようにきつくペニスを絞めつけた。

「ああ……これがお姉さまの達したときのお顔……ああ、素敵ですわ……」
黒子が、はあはあと息を荒らげながら、美夢の顔を愛でていた。

「つぶは! はあっ!!!」
「あらあら……お姉さま……女の喜びはこんなモノじゃあ、ありませんですの!!!」

「はぐん〜!!!」

長く絶頂していたせいで、呼吸を忘れていた美夢は必死に息を吸い込むが、黒子の愛撫ですぐにまた絶頂に達してしまう。

「まだまだですわっ!!!」

敏感な性感帯と化した身体は何度も何度も黒子によってイカされてしまうのだった。



「っ!! あひっ……ふあ……」

すっかり脱力しきった絶頂の余韻が残る身体を、黒子に預けきっていた。

「あはシ……お姉さまの唾液……なんという甘さ……」

口からも力が抜け、だらしなく開かれた口から垂れる涎は、
抜け目なく黒子によって舐めとられていた。

「あふあ……ら、らめえ」

それに気づくも拒絶する力も残っていない。

「ふう……すごかったな」

美夢の中からペニスが引き抜かれる。

「あ……」

名残惜しそうに、ひくひくと腫の入口が震えた。

子宮へ入ることなく、膈内へとどまっていた精液がどくどくと、外へと溢れ出す。

「あんっ!! ああ……そうだ……あ、あかちゃんできちゃう……」

膈から垂れる精液を見て、ようやく重大な事実気づく。

「いいじゃんか。赤ちゃんできたら、産めばいい!!」

「ふえ? あ、あんたはそれでいいの?」

「ああ、おれは全然問題ないぞ!!」

「じゃあ産む あんたのあかちゃん産む……えへ、えへへ……」

そう言うと、美夢は笑顔を浮かべたまま、ぱたりと身体を横たわせ深い眠りについた。

「くふふ……お姉さまの意志も確認できましたし……
早く私の中で精液を出してくださいな」

「あ、ああ……」

あられもなく足を広げ、当麻の前で膣の入口を開く。

「ああ……これでお姉さまとわたくしは……
同じ父親の子供をもつということになり、今以上の関係に……
ぬふっ……ぬふう くふふ……」

黒子の御坂美琴にかける執念は凄まじかった。

類人猿と呼んで蔑んでいる俺のペニスを受け入れ、
美琴と腹違いのきょうだいである
子供を欲するのだから。

「くうっ!! 出たぞ……はあ、はっ!!」

「ああっ!! おねえさまの愛液がたっぷり
染み込んだ棒だと思えば……
そんな粗末なイチモツなど……
苦にはなりませんわ……」

「くっ……こんなのに、
好かれる美琴も……災難だな」

「ん? なんが言いました?」

「いや、何も……」

自己満足な将来を思い描き、
笑みを浮かべる黒子の狂気に、
たたたた気圧されるのであった。

「ふあっ! くっ……黒子……ダメえっ!!!」

「あはん…… おねーさま、おねーさまあん!!
感じますわっ……!!
とつても芳醇なミルクの香りが、お姉さまの胸からっ!!!」

黒子の舌がべろべろと美夢の胸に這い回る。
すんすんと匂いをかけば、母乳の甘い匂いが
胸からは漂ってきている。

「うそ……うそよお 赤ちゃんまだ
生んでないのになっ!!!」

「あら……おねえさま、
赤ちゃんを生む前からでも、
おっぱいは出るんですのよ?」

「ああ、そうだぞっ!!
生んだ後に出そうが、
生む前に出そうが……
そんなのに変わりはないだろ?
それなら……出せっ!!
出じちまえよっ!!!」

激しくして、お腹の赤ちゃんに異常を起こすなんてことに
万が一にもならないように最新の注意を払いながら、
下からペニスを突き上げ動かす。

「んやっ!!! ふあっ!!!」

ペニスの先端の鈴口がしつこいほどに子宮口を押し込んだ。

「んやっ!!! だめえ……赤ちゃんびっくりしちゃう……」

「んふっ……もっと感じさせて差し上げます……
ほおら……ここを、こうして」

黒子が美夢のクリトリスに指をあててびんっとはじく。

「んあっ!!!そこ……だめえっ!!!」

「くはっ!!!」

びくんっと思いが瞬時に硬直したと思うと、
膣壁がぎゅっつとペニスを締め付けた。

「あらあら……お姉さま、
お腹の赤ちゃんは喜んでましてよ。
びくんびくんって、動いていますの……」

「あは……ほんとに……赤ちゃん、うごいてるう……」

お腹の内側からほんほんっつと、膨らんだ腹の表面を叩いているのを美夢は感じ取っていた。

「ふあっ……ン あっ!!あっ!! だめえっ!!!」

「あッ!! お姉さまの母乳がっ!!
ああ……と一つでもおいしいですわよ」

「あはっ……で、でてるう……」

ダムが決壊のように、一度出るようになると、
少し刺激を加えるだけで止めどなく
次から次へと母乳が吹き出していた。

「あひっ!! だめっ!!
おっぱい出しながら……イくうっ!!!」

「み、美夢っ!! くうっ!!!」

膣の締め付けが激しくなり
包まれたペニスも限界に近づく。

「お姉さま……
イってください……
お手伝い致しますわ」

黒子の指がぎゅっと
クリトリスを摘み、
しゅっしゅっどこすり始める。

「ひやっ!? やらっ! それだめえっ!! オマンコ熱くなるっ!!
感覚なくなっちゃううう……っ!!!」
「はあっ……はっ!!!」
よし……だすぞ! いっしょに……イくんだった!!!

「はあ……はあ……私も……お姉さまと一緒に!!!」
気づけば黒子は自身で、自分の敏感な部分をいじり慰めている。
「くあっ……イくっ!!! 美夢お!!!」

当麻は
”子宮の中にいる赤ちゃんにかける!
なんなら、もう一人くらい赤ちゃんを作る!”
くらいのつもりで子宮の口に先端をくっつけ精液を吐き出した。

「ふあっ!!! ン ああ~!!!!」

まだしっかりと子宮口は閉じているから、
実際には赤ちゃんにかかることはないが、美夢には十分な刺激となった。

「はあああああっ!! おっぱい出しながら……
イくっ……イっちゃう~~!!!」

ひくひくっと、膣壁が収縮し、ペニスに更なる射精を促す。
「んくっんくっ……ああっ!! お姉さまのおっぱいおいしいですわ……
私もそろそろっ!!! ンひっ!!!」

喉を鳴らしながら美夢の母乳を飲み下し、黒子も果てる。
受液の混じった濃厚な精液と、母乳の甘い匂いが
時を置かずに部屋を満すのだった。

「よーし、引っ張り出すぞ！」

「んぐっ！！ だ、出して……あっ！！ はあああっん！！」

出てきた赤ちゃんの頭の根元、首のあたりに手を添えて、慎重に美夢の身体の中から赤ちゃんを引っ張り出す。

「はあっ！！ んああっ！！」

するするっとさしたる抵抗はなく、身体はあっという間に水中へ躍り出た。

「んあ……！！ふう……で、出たの？」

身体の中から赤ちゃんと羊水分の重さがぽっかりと抜け落ち、ふわっと、下半身が浮き上がる。

「ああ……待ってる、すぐに見せてやるからな……」

と、美夢が出産し終わるのを待ちかねてたかのように……

「っ！！ あっ！！ はあん……！！」

黒子の方もぽっかりと赤ちゃんの頭が水中に姿を表していた。

「わたくしは、自分で……こうでしたわね……ンあんっ！！」

驚くべきことに、黒子は自分自身の手を添えて、いま美夢にしたのと同じ要領でするっと、赤ちゃんを取り出していた。



「よーし、引っ張り出すぞ！」

「んぐっ！！ だ、出して……あっ！！ はあああっん！！」

出てきた赤ちゃんの頭の根元、首のあたりに手を添えて、慎重に美夢の身体の中から赤ちゃんを引っ張り出す。

「はあっ！！ んああっ！！」

するするっとさしたる抵抗はなく、身体はあっという間に水中へ躍り出た。

「んあ……！！ふう……で、出たの？」

身体の中から赤ちゃんと羊水分の重さがはっきりと抜け落ち、ふわっと、下半身が浮き上がる。

「ああ……待ってる、すぐに見せてやるからな……」

と、美夢が出産し終わるのを待ちかねてたかのように……

「っ！！ あっ！！ はあん……！！」

黒子の方もほっこりと赤ちゃんの頭が水中に姿を表していた。

「わたくしは、自分で……こうでしたわね……ンあんっ！！」

驚くべきことに、黒子は自分自身の手を添えて、いま美夢にしたのと同じ要領ですると、赤ちゃんを取り出していた。





「ふう、がんばったな！ ほら……」

そっと美夢に生まれたばかりの赤ちゃんを引き渡す。

「あはっ！！ 私と……あんたの赤ちゃん……」

美夢が生まれたばかりのわが子を引き寄せて、
しっかりと胸に抱きとめる。

「はあ……はあ……さすがに疲れましたが、
これで私とお姉さまは本当の姉妹も同然……
さあ、いらっしやい！！ くふっ……くふっくふっ！！」

黒子もしっかりと自分の胸元に引き寄せた。

「黒子……その、我々の境の考え方はどうなんだ……
その～将来が不安なんだが」

「あら、不本意ながら類人猿の血が混じっているとはいえ、
わたくしの子供ですから、
愛情を持って育てていきます。そこは保証致しますわ。」

「そ、そうか、ならいいんだが……」

下手をすると、俺の子供でもあるのに、
触らせてくれないかもしれない……
そんな不安がよぎってしまう。

「あはっ！！ほら、ちゃんと産声を上げ始めたわ！！ ……かわいい」

美夢の赤ちゃんがまずはじめに産声を上げる。

「っ！！ あらあら、さすがは妹、姉のあとを追従してますわ……」

つられるように黒子の赤ちゃんも産声を上げ始めたのだった。



「ふう、がんばったな！ ほら……」

そっと美夢に生まれたばかりの赤ちゃんを引き渡す。

「あはっ！！ 私と……あんたの赤ちゃん……」

美夢が生まれたばかりのわが子を引き寄せて、
しっかりと胸に抱きとめる。

「はあ……はあ……さすがに疲れましたが、
これで私とお姉さまは本当の姉妹も同然……
さあ、いらっしやい！！ くふっ……くふっくふっ！！」

黒子もしっかりと自分の胸元に引き寄せた。

「黒子……その、我々の塊の考え方はどうなんだ……
その～将来が不安なんだが」

「あら、不本意ながら類人猿の血が混じっているとはいえ、
わたくしの子供ですから、
愛情を持って育てていきます。そこは保証致しますわ。」

「そ、そうか、ならいいんだが……」

下手をすると、俺の子供でもあるのに、
触らせてくれないかもしれない……
そんな不安がよぎってしまう。

「あはっ！！ほら、ちゃんと産声を上げ始めたわ！！ ……かわいい」

美夢の赤ちゃんがまずはじめに産声を上げる。

「っ！！ あらあら、さすがは妹、姉のあとを追従してますわ……」

つられるように黒子の赤ちゃんも産声を上げ始めたのだった。

「んっ……大丈夫か？オルソラ……」

すっかり腹の大きくなったオルソラに気を使いながら、
膣の中にペニスを挿入した。

すぐに膣壁はペニスにまとわりつき、
スムーズにそれを奥に送り込むための蜜で中は溢れかえる。

「は、はい……大丈夫です。
遠慮は必要ないのでございますよ……」

腹の張りがいつもと変わりのないことを
確かめる。
急に産気づいてしまうような
異常事態にならないことを
確信して返事をする。

「んっ！！ よし、動くぞ……」

ゆっくりと、上下にピストン運動しながら、
膣内の更に奥、子宮口を目指してペニスを打ち付ける。

「んあっ！！ はあん……」

オルソラの口から嬌声が漏れ出す。

腰をふるのと同時に豊満な乳房に手を添え、
ゆっくりと指をその中へうずめる。

「あはあんっ……く、くすぐったいです……」

臨月で出産が間近に迫ったオルソラは、
乳房に母乳がたまり張りが強くなって苦しむ日々が続いている。
安定期に入ってからは毎日のように、
セックスの傍ら母乳を搾り出しているのだった。

「ああ……も、もっと……
少々激しくしたくらいでは……わたくしとあなた様の子は……
驚いたりはしないので……んっ！！
ございまっ……すうっ……ん！！
ですから、もっと激しく……！！」

「くあっ！！オルソラっ！！よしっ！！ 体調悪くなったらすぐ言えよ！！
ちよつと激しくするからなっ！！」

腰の動きを早めゆっくりとしたピストン運動をやや激しい動きへと切り替えた。
じわじわと、ペニスが射精へと近づいてゆく。

いつの間にか、オルソラ自らも自身の胸を愛撫し始めていた。

「ああ……胸が張ってきました……
も、もう……出てしまうのでございますっ!!!」

「よーし、出せっ!!!」

「はいっ!! おおっ!! はあおおっ!!!」

オルソラの絶叫が部屋にこだました。
と、同時にびゅっびゅっど、2つの膨らみの先端から
母乳噴出が始まった。

びちゃびちゃと、
結合した二人に母乳が降りかかり、
たちまち部屋中に濃厚な
ミルクの香りが漂う。

「はああん……ま、また……
おっぱいを出すのと同時に、
イッてしまいました……
はあ……はあん」

母乳を吹き出しながら絶頂を繰り返していた。
身体の内側から生じる快樂により、身体はブルブルと歓喜に震え、
愉悅のため息が口から漏れる。

「か、体の方は大丈夫か? そんなに……
震えてで……なんとも……」

「ああ……すっかり快樂の虜となってしまいました……
わ、わたくしは……シスター失格なのでございますよ……あはあん」

当麻の言葉はオルソラの耳には入っていなかった。

「まあ……だ、大丈夫かな……う、くっ! それなら……
オルソラ、俺もそろそろ……出すぞっ!!!」

収縮を繰り返す膣の動きに耐え切れず、当麻はオルソラの膣内へと精液を解き放つ。

「はおおっ!! ああ……お腹が満たされてゆくのでございます……
また……イッしまうのでございますよ……」

「くうっ!! さらに締め付けが……!!!」

「はあっ、なんということでしょう……
子を宿しながらも、私の子宮は精を受ける喜びに、
打ち震え……っ!! はオオンツ!!!」

敬虔な信徒だったオルソラは、今ではすっかり禁欲的な生活とは真逆の背徳な
行為に悦びを見出す、一匹のメスと化していた。